

---

# バカとテストと召喚獣 ~ 伝説と呼ばれたバカ ~

アルたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣      ～伝説と呼ばれたバカ～

### 【Nコード】

N0891X

### 【作者名】

アルたん

### 【あらすじ】

松下啓吾は何処にでもいる工芸職人。相棒の吉井明久と共に踏み込んだ文月学園で待ち受けたものは、摩訶不思議なシステム…と日夜しのぎを削るバカたちだった！青春を満喫する彼等は安息の日々を送ることなく戦火の渦に巻き込まれるのだった…。

## 登場人物紹介1

まつした  
松下 啓吾

身長 170cm前後

外見 クールなナイスガイ

性格 冷静沈着故にやや覚めているが温厚

趣味 近接用武器造り

特技 ペーパークラフト

好き 素直で寛大な精神を持つ者

嫌い 偏見者、勸善懲悪主義者

### 概要

明久の幼馴染で家は近く、度々出入りしており、明久からは「けいちちゃん」と呼ばれている。

両親は2人とも外国企業勤めなので仕送りを貰いながら一人で暮らしている。

中学の頃に近接武器にのめり込み、現在も武器の開発をしており、

特に木刀に関してはプロに匹敵する程の腕前。

交友関係は…今までの顧客とは面識はあり、坂本や土屋とは仲が良  
い。

只今身近な道具で家庭用品や改造文房具を研究中。

## 成績

近接武器を作る為には英語、数学、古典、歴史、保健体育の知識が  
必要なのでそれらに関しては300点前後。

反面それ以外は50点を切っているので総合科目は2150点程。

## 召喚獣

武器 ナタナイフ

20本所有。

服装 忍者

ナイフは背負ってあるリュックに内包

吉井 明久(変更点のみ)

・ 中学時代は常人離れの身体能力を持ち、150cm超の啓吾作木刀《竜光》で多くの戦士を地に沈めた経歴を持つ。当時は荒んだ振る舞いばかりで一部から《金色の疾風》と称された。

・ 吉井 玲 帰還以前から同居人がいる

## 第1話 プロローグへ原作第1巻編開始〈前書き〉

バカテスト 化学

### 第1問

調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例をひとつ挙げなさい。

松下啓吾の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点

合金の例……ジエラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、松下君は引っかかりませんでしたね

坂本雄二の答え

『問題点……ガスを止められていたから。』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

、

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金）　すごく強くて、未来金属Aと  
マグネシウムを合成する。』

教師のコメント

すごく強いと言われても。ゲームのやりすぎです。

## 第1話 プロローグ〈原作第1巻編開始〉

視点：啓吾

文月学園に入学して二度目の春が訪れた。

只今学園までの通学路を1人で爆走中。

今日に限っていつもよりかなり遅い時間まで眠ってしまったのだ。

当然朝食など食べていない。

今日はクラス発表だというのに、疲労だけが溜まり、ドキドキ感など遅刻するか否やで薄れきっていた。

「けいちゃああんまってよおおお！」

ふと呼びかけられたが、立ち止まれば遅刻確実なので振り返らずに、  
「相変わらずだな。どうせゲームを夜明けまでしたんだろ？」

独特のおバカ臭を撒き散らす吉井明久は私の昔からのパートナーだ。

「急ごう。鉄人に目をつけられる。」

「うん。」

学園に向かう。



「そういえば、今日はクラス発表だけどドキドキするね！」

「明久がFクラス以外なら日本滅亡だな。」

「舐めないでよ啓ちゃん。10問に1問は解けたんだ、絶対にFクラスなんて有り得ないさ。啓ちゃんだって試験中ずっと寝ていたじゃないか。」

「あの日は熱があって問題に集中出来なかったんだ。それよりも登校時間まで3分ですがどう間に合わす？」

「全力疾走なんてどうかな！」

「走れ走れ！」

「心臓破りの坂を超えれば校門が見えてくる！」

「間に合えー！ー！」

「ズサアアアアアー！ーッ！」

「明久が校門へスライディングした。」

「目の前に佇むのは西村宗一先生。」

「吉井に松下。初日から遅刻4秒前の登校とは良い度胸だな。」

「遅れさえしなければどうということはないですよ鉄人！」

「あれだけ全速力で走ったのに明久は息切れ一つしないだこっちこっち」

はもうバテバテだ。

「に、西村先生、おはようございます…。」

俺は汗だくになりながらも挨拶した。

西村先生には生徒の間で《鉄人》と言う渾名で呼ばれている。

趣味はトライアスロン、真冬でも半袖、極めつけは2m超の鋼の肉体だ。

「おはよう…次からはもっと早く来い。」

鉄人は溜め息をつくと足元に置いてあった箱から封筒を取り出し、俺と明久に渡してきた。

頭を下げながら受け取った封筒には宛名の欄にそれぞれ『松下啓吾』『吉井明久』と書かれている。

「啓ちゃんを吃驚させてやる。」

「しかし変わった方式ですね。」

鉄人はすぐに理由を説明してくれた。

「ウチは世界的にも注目されている《試験召喚システム》を導入した試験校だからな。これもその一環というワケだ。それと早く封を切って中を確認したらどうだ？」中の確認を促す西村教諭。それに返答しながら封を切って紙を取り出す。

「クラスなんて分かってるんですけどね、特に吉井に関しては。」

「そりゃそうだろう。」

「当たり前ですよ。だってあのテストは吉井にとって難しいものだったのです。」

「ああ。しかし松下、お前は無理をしていたのだな…。」

「体調管理もテストの内ですから。」

「そうか。…吉井、何度見返しても現実が変わらんぞ。」

「まだだ！まだワンチャンあります。」

明久はFと書かれた紙を様々な視点から確認をしていた。

明久が鉄人に嘆願する。

「最下位クラスなんて最悪だ！再試験を求めます！」

俺は明久の肩を叩いて諭した。

「100回受けても結果は同じだ。」

「ならば一文字加えてEにしよう！」

「既にFクラスの一員として登録されている。」

「信じられない、この僕がFクラスだなんて…。」

そのフラグは去年から立っていたぞ。

鉄人は呆れた様子で、

「クラス発表は貴様らが最後だ。早く指定の教室に向かわんか！」

「はい。明久、行くぞ。」

「…はい。」

「すぐ慣れるさ。嫌なら《試召戦争》で上位クラスの設備を奪えばいいんだし…というかちゃんと勉強していれば上にも行けただろうに。」

そう、奪えばいいのだ。

Fクラスの設備は学年で最低らしい。

しかし《試召戦争》で勝利すれば上位クラスの設備と交換出来る。

鉄人は笑みを溢しながら、

「なら勝つために精一杯勉強させてやろう。《試召戦争》をやりた  
いなら尚更努力が必要となる。俺もとことん貴様らを補習漬けにし  
てやるから頑張れよ。」

「明久。向かうとするか。少し遅れたヒーロー気取りで。」

「うん。啓ちゃんが同じクラスで良かったよ！」

…単純だなあ。

「では鉄人。俺たちはこれで。」

「てつじ…時間がない。とっとと行ってこい！」

そう鉄人に挨拶をして俺達は靴を履き替えて2年生の教室がある3階に向かった。

-----

「明久。頭の良い奴はAクラスで悪い奴はFクラスだぞ。」

「やだなあ啓ちゃん。僕がそんな事間違えると思ってるの?」

「普通の人は間違えないだろうな。」

明久はまだブツブツ言っている。

「試験の手ごたえはあったしCかDあたりの計算だったんだ。」

足し算からやり直せ。

「明久…10年間付き合ってきたんだが、『もしかするとコイツはバカなんじゃないか』と疑いを抱いていた。」

「それは間違いさ。」

と明久は微笑んだ。

「お前を疑うなんて俺こそ謝らなければならない。」

「そうだね。」

「だが疑いはなくなった…明久が疑いの余地のない真正銘のバカだということかな！」

『吉井明久

Fクラス

全てを賭して物凄く頑張りましょう』

「その一切れの紙が証明だ。」

「…もう現実から逃げなくてもいいんだね。この振り分け試験、敗けたのは僕はだったんだね。」

沈む明久を先導して3階に辿り着いた。

酷い茶番劇だ。

そこで待ち受けていたのはホテルを思わせる程の豪華な教室だった。

「…すごいね啓ちゃん。」

「Aクラスは流石に広いな。」

これには唾然とならざるを得ない。

通常の6倍の広さを持つ教室だと？

『私はこの2年A組の担任、高橋洋子です。よろしくお願いします。』

大きめの窓から中を覗いて見ると、髪を後ろでお団子状にまとめ、眼鏡をかけてスーツをきつちり着こなした知的女性の代表のような教師が…高橋先生とはAクラスらしい。

彼女がそう告げると、黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイに担任教師の名前が表示される。

贅沢すぎる、他の教室の設備が悲しいことになってるんじゃないのか？

「あの先生綺麗だなあ。」

「ああ、美人さんだ。」

俺は若々しく美しいのには弱い。

『まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他の設備に不備のある人はいますか？』

教室は五十人の生徒が普通に授業を受けるには過剰なほどの広さと設備があつて、冷蔵庫には当然のように各種飲料やお菓子を含めた

様々な食料があつてエアコンは教室どころか客人に一台で、それぞれが好みの温度に調整できるようになっている。さらに天井は総ガラス製でありながらスイッチひとつで開閉可能となっていて、壁には格調高い絵画や観葉植物がさりげなく置かれていた。

『参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給いたします。他にも何か必要なものがあれば遠慮などすることなく、何でも申し出てください……。では、始めにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前にきてください。』

『…はい。』

クラスの生徒たちが注目した。

『…霧島翔子です。よろしくお願ひします。』

物静かな雰囲気で穢れを近づけない神々しさを放つ。

それに黒髪を肩まで伸ばしているので、まるで日本人形のようなようだ。

視線の中心にありながら顔色一つ変えずに淡々と名前を告げていく。

『……………。』

聞き損ねた。

『Aクラスの皆さん。これから一年間、霧島さんを代表にして協力し合い、研鑽を重ねてください。これから始まる『戦争』で、どこにも負けないように。』



こうしてはられない。

私達もクラスへと向かきましょう。

「そろそろ行こう。」

「あ、うん。そだね。…カロリーが一杯だ。」

こいつには何が見えているんだ…。

.....

二年F組と書かれたプレートのある教室についた俺達は緊張していた。

「一緒に行こう。」

「うん。」

深呼吸して一緒に

ガラッ

と開けて初撃を撃ち込む！

「「「すいません、ちょっと遅れちゃいました」「」



耳をつんざくような男、こんなむさくるしい耳をつんざくような男、こんなむさくるしい男ばっかのクラスに居なければならぬ女性が可哀想だ。

「で、何で雄二が先生の代わりを？」

明久が疑問符を浮かべた。

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ。」

「世も末ですね。」

「何を言おうがこのクラスの全員が俺の奴隷って事だからよろしくな。」

ふむ、あの《悪鬼羅刹》が代表とは、これは楽しくなりそうだ。

Fクラスの面々はみんな床に座っている。

畳に卓袱台とは中々凝っているではないか…廃墟なら完璧なのが悔やまれる。

「それにしてもさすがはFクラス。ある意味珍しい設備だね。」

明久と私はとりあえずあいている席でも探そうとおもった時、不意

に背後から覇気のない声が聞こえてきた。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

そこには寝癖のついた髪によれよれのシャツを貧相に着た、いかにもさえない風体のオジサンが居た。

どう見ても10代ではない。このクラスの担任だ。

「それと席についてもらえますか？HRホームルームを始めますので」

明久と雄二がそれぞれ返事をして席に着く。

先生は明久たちを待つてから壇上でゆっくりと口を開いた。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎ふくはらしんです。よろしくお願いします。」

福原先生は黒板に名前を書こうとして、やめた。

チヨークすら無いんかい！

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出てください」

クラスメイト達が続々と不満を漏らす。

「せんせー、座布団に綿が入ってないです」

「我慢してください」

「せんせー、卓袱台の足が折れました」

「ボンドで直してください」

「せんせー、窓が割れてて隙間風が寒いです」

「ビニール袋とセロハンをあげますから直してください」

…これは酷い、けれども自力で問題を解決するのってやり甲斐があったりする。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、松下君、君からやってもらいましょう。」

ざわ…ざわ…。

いきなり自分をアピールするチャンスが到来！

やってやるっじゃないか！

俺は深呼吸して静かに口を開いた。

第1話 プロローグへ原作第1巻編開始 (後書き)

作者です。書くの初めてなので起承転結すらままならないですが、  
未永くよろしくお願いします。

## 第2話 バカと美女と自己紹介（前書き）

前回、誤字脱字が多く読みづらかった事、申し訳ありませんでした！

今回はバカテストはありません。

I・K様、感想有難うございました。

より精進して参ります。

これからは前書きにバカテスト、後書きに近況報告を綴ります。

## 第2話 バカと美女と自己紹介

視点：啓吾

自己紹介において、第一印象が全てを決める尺度となる。

短所を極力露出せず、かつ長所を強調し、端的に述べてみせろ！

「松下啓吾だ。一年間よろしくな。」

簡単に名前だけ告げて席につく。

…こんのバカ野郎！

名前だけ言っちゃった上にそのまま座るとか、何という失態だ…！

ま、まあ自己紹介が全てといつ訳では無いし、まだ慌てるような時間じゃない。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

この独特の言葉遣いといえば木下秀吉。

男装女子とは分かっていらっしやる。

去年演劇部の小道具の助っ人として行った時に出会った美女…Fクラスとは意外だ。

「というわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい。」



自己紹介が終わってしまった…後でお茶でも飲み誘うかな。

「……………土屋康太。」

俺の顧客にして親友のムツツリーニか…この間も煙球や警棒を作るのを手伝ったし、話しやすい。

「…です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です。」

この声はまさか…。

「趣味は吉井明久を殴る事です。」

明久が青ざめるのを見た俺は慰めに行く。

「彼女さんも同じクラスで良かったじゃない。」

「え！？島田さんも一緒！？また毎日ボコボコにされる日々が始まるんだ…。」

殴られる程度でも、女子と交流出来ると思えば痛みなんてありません…ドMホイホイ。

「ハロハロー」

島田がこちらにきずき、笑顔で手を振ってきた。

「……………あう。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

島田の自己紹介がおわり、その後は名前を告げる作業が進む。

「僕の番だ。」

明久が立ち上り、一呼吸置いて喋る。

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽にダーリンって呼んで下さいね」

『『『『『ダアアーリーーン！！』『』『』『』』』』』

野太い声の大合唱…気持ち悪さとノリの良さの合わせ技！

「…忘れてください。」

明久は肩身が狭くなったのか席を座った…ドンマイ。

その後はまた名前を告げるだけの作業続いていたが、不意に教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れてすみま、せん・・・」

「えっ？」

教室全体から驚いたような声が上がった。

騒がしくなるクラスの中で担任の福原先生がその姿を見て話しかけ

た。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さん  
もお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします。」

「はいっ！質問です！」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が右手を挙げる。

「あ、は、はい。なんですか？」

「なんでここにいますか？」

聞きようによつては不愉快な質問だ。

しかし、姫路瑞希の成績は俺よりずっと高いし、Aクラス最有力候補と言われた程…本来ここには居ない筈だが。

「その、振り分け試験の最中、高熱をだしてしまいました……。」

なるほど、試験中に倒れた女子生徒…つまり明久が介抱したのは姫路だったのか。

振り分け試験の途中退席は0点扱いになるから、結果としてFクラスになってしまった訳だ。

彼女の言い分を納得したのか、クラスの中でもちらほらと言いつの  
声上がる。

「そう言えば俺も熱の問題が出たせいでFクラスに。」

「ああ。化学だろ？アレは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

…バカばかりだ。

「で、ではっ一年間よろしく願いしますっ！」

姫路は逃げるように明久と雄二の隣かつ私の真後ろの卓袱台に着く。

「き、緊張しました」

「あのさ、姫ー」姫「姫路。」

明久の声が私に、さらに雄二に遮られる。

「は、はいつ。なんですか？えーっ」と…」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「俺は松下啓吾。何とでも。」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

「姫路さん…体調はどう？」

明久が姫路さんの体調の話を持ち掛けた。

俺も同じ事を聞こうとしていたのでここは引く。

「よ、吉井君!？」

明久の顔を見て驚く姫路。

明久が余りに不細工だからショック状態に陥ったのか、これは謝らなければ。

「「姫路。明久がブサイクですまん!」」

雄二とは気が合うようだ。

「そ、そんな!目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ!その、むしろ…」

雄二は首をかしげながら、

「そう言われると、確かに見えてくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺にの知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし。」

「明久に興味持ってるなんて、余程物好きなんだな。」

「え？それは誰……」

「そ、それって誰ですか！？」

明久よりも姫路のほうが食いつきがいい……。

「確か、久保ー利光だったかな？」

久保利光……男の子。

明久が窓から飛び降りるのを阻止！

新学期初日から散々な扱い……これから一年間、明久の精神が持つのだろうか？

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

担任が教卓を軽く叩いて警告を発すると、

バキィッ バラバラバラ……

教卓はゴミ屑と化した。

「えー……替えを用意してきます。少し待っていてください。」

福原先生はそう告げると、教室から出て行った。

近くでは姫路が苦笑いをしていた。

これがFクラスの洗礼というのか。

先生が出るなり明久が雄二に用があると行って教室から出て行った。折角なので俺も外へ息を吸いに行くか。

…教室内では残りの生徒達による自己紹介が行われていた。

何人が有名人がいるらしく、幾度と教室がざわめく。

聞いたところでは須川と横溝は《リア充撲滅委員会》を設立したらしく、異性行為を行った男子を亡き者にし続けているそうで、問題ばかり起こしているらしいとのことだ。

…ちゃんとやっつけていけるのだろうか。

暫くすると先生が戻ってきたので明久と雄二と一緒に教室に入った。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

へい。」

先生に呼ばれて雄二が席を立つ。

ゆっくりと教壇に歩み寄る姿はふざけた雰囲気醸しながらも眼力には熱が籠っていた…。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

雄二は頷く…クラス代表といっても最低クラスの成績者の中であ

たま一番に過ぎず、俺や姫路に比べればその成績は遙かに劣る。

「俺はFクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きなように呼べ。」

坂本は、ゆつくりと、全員の間を見るように告げた。

こんな馬鹿だらけのクラスが試召戦争をやったところで、勝てる可能性は低いし、これから先、成績が上がるとは限らない。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが…不満はないか？」

「……大ありじゃあつ!!」「……」

一瞬にしてFクラスが炎に包まれた。

彼らの不満はもつともだ。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そつだそつだ!」

「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ!改善を要求する!」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ?あまりに差が大きすぎる!」



堰を切ったかのように次々とあがる不満の声。

勉強という努力を怠った人が言える台詞では無いが、しかしここまで酷い設備だと俺も奮起せずにはいられない。

「みんなの意見はもつともだ。そこで、」

級友達の異常なまでの熱狂に満足したのか、自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だ！…FクラスはAクラスに《試験召喚戦争》を仕掛けようと思う！」

狂気の沙汰だ…Eクラスならまだしも、最高クラスに挑むなど無謀なのだから。

Aクラスへの挑戦状が意味するものなど誰も理解出来る。

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらぬ」

須川が目を光らせた。

姫路さんという高嶺の花を抜け駆けして奪おうとはとはいいい度胸じゃないか。

それにしても、試験召喚戦争とは…ついにシステムを使う時が来た

んだな。

科学とオカルトと偶然により完成された《試験召喚システム》、これはテストの点数に応じた強さを持つ《召喚獣》を喚びだして戦うことのできるシステムで、教師の立会いの下で行使が可能となる。

ちなみに、この学園のテストは点数に上限がないため、1時間という制限時間と、無制限の問題数が用意されている。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された先進的な試み。

その中心にあるのが、召喚獣を用いた試験召喚戦争だ。

その戦争で重要になるのがテストの点数なのだが、AクラスとFクラスの点数は桁が違う。

Aクラス一人に対してFクラス三人でも勝てるかどうか、いや、相手次第では四、五人でも負けるかもしれない。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝たせてみせる」

「何を馬鹿なことを」

「できるわけないだろう」

「何の根拠があつてそんなことを」

雄二が何の根拠も無しに動くとは思えないが、現実是非情なものだ。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのでき

る要素が揃っている。それを今から説明してやる。」

得意の不敵な笑みで、皆を見下ろす。

根拠…聞いてみるか。

「おい、ムツツリーニ。豊に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太と呼ばれた男子生徒。

姫路がスカートの裾を押さえて遠ざかると、ヤツは顔についた豊の跡を隠しながら壇上へと歩きだした。

大変な事になる…俺はそう直感した。

### 第3話 バカ達の侵攻！Dクラスへの挑戦

視点：啓吾

「コイツがあムツリーニの有名な性職者だ！」

《瞬撮魔》と呼ばれた男といえば、後にも先にも彼以外いない。

ビルからビルへ飛び移り、狙った被写体を驚異的な脚力で貪り、撮る。

やがて情報屋と化した男は今日も何処かで店をする…。

「なっ……あのムツツリーニか？」

「恐ろしい奴と同じクラスになっ たな；」

「見ろ、あそこまで否定してるぞ。」

「ムツツリの名に恥じない神の子…！」

要約すれば只の盗聴&盗撮犯、だが確かな腕を持つ。

雄二はさらに述べる。

「それに木下秀吉。演劇部部长にしてAクラスの木下優子の双子の弟だ。」

「む？そこまでいわれるものかの？」

弟…男だと…何という美貌だ、興味深い！

「可愛すぎだろ。」

「秀吉、結婚してくれ……！」

「まさに男の娘のホープだな。」

「……秀吉は新たな性別を開拓した功労者でもある。」

結婚するのは俺…ゴフツ…男とはお付き合いは出来ないな（「T」）でもお友達ならきつと問題は無い。

「それに姫路だっている。」

目覚める啓吾、男の娘は二次元だけで十分だつ。

「わ、わたしですか?!」

「ああ、頼りにしている。」

「が、頑張ります！」

目が癒される…それは正に、信頼と安心の女神だ。

「啓吾、みとれていないで早くこっちに来い。」

…ふう。

俺は欠伸をしながら、雄二のもとへ行く。

教室が一瞬にして静まり返った。

先程とは冷ややかな態度：結構落ち込むな。

「こいつが…：中学時代《武器商人》とまで呼ばれた男だっ！」

うわあ、いきなりさらけ出しやがった！

「…な、なんだって！？」「…」

うってかわってざわめくクラスメイト。

「改造、修理、造作の全てをやったのける…：本当にいたのか！？」

「数年前の名のある剣術使いはみな奴の造った物を使用したそうだし！」

「刀造りなら右に出るものはいない…：この学園にある竹刀は全て松下が提供したらしい！」

「さんを付けるよデコ助野郎！」

なんでそこまで知ってるんだ！

匿名で寄付したのに…：バレバレだっ！

兎に角、誤魔化そう。

「ま、松下啓吾、だ、…出来れば松下と呼んでくれ。昔は確かにそ  
つちの仕事をしていたが、現在はまったくインテリアに関してやっ  
てるから、引かないでくれよ、な？」

「「「師匠と呼ばせて頂きます！」「」「

もう遅かった…。

落ち込む俺に雄二が肩を叩く。

「済まなかったな。全ては士気を上げる為、なあに、七十五日経て  
ば忘れるさ。」

こいつ他人事だと思って…ま、いつか。

俺が席に戻るなり、雄二が明久を呼びつける。

「最後に…このクズが吉井明久だ。」

Fクラスは無に帰した。

然り気無く酷いことを…。

「吉井明久？誰だそれ？」

「っていうか、吉井って奴うちのクラスにいたか？」

さっきまでダーリンと言われていたのに忘れられるのが余りにも早  
すぎる。

「ちょっと、なんで今僕の名前を挙げるのさ雄二い！」

「分からないのかバカ久？だったら教えてやる。こいつの肩書きは  
《かんさつしよぶんしや観察処分者》だ。」

沈黙の後、

「おい、観察処分者って……」

「確かバカの代名詞って言われてるよな」

「ち、違うよ。ちょっとお茶目な16歳につけられるあだ名みたいな物で……」

無駄なあがきだ。

「確かに観察処分者はバカの代名詞だ」

「雄二、キサマああああ……！」

俺は明久を押さえ、

「落ち着け、俺よりずっとマシだろ……」

「……ごめん。」

二人悲しんでいると須川が雄二に意見した。

「話が反れたな…観察処分者って召喚獣の受けたダメージも召喚者にかえってくると聞いたが、それはろくに召喚出来ない奴が1人い



ると言って差し支え無いんだな？」

須川は中々筋がいいようだ。

観察処分者は、生徒に与えられる特別な称号だ。

成績も態度も最悪の生徒に与えられ、その名の通り、教師たちに一挙一動を監視されるのだ。

簡単に言えば学園側に明らか損害を被るといったとんでもないバカに与えられる称号だ。

更に観察処分者となった者の召喚獣が受けたダメージの何割かを生身に直撃する。

他にも特別な点が幾つかあるそうだが、そこまで詳しくないので省略する。

「居ても居なくても同じようなもんだから大丈夫だ。産廃とと思ってくれればいい。」

明久が泣いている。

「もちろん、俺も全力を尽くす。」

スルー：明久よりも上野公園の鳩の方が良い待遇を受けているのだろうか？

「おい、坂本って小学生の頃神童って呼ばれてなかったか？」



Dクラスへの挑戦。

忙しくなりそうだ…回復試験でも受けるか。

-----

午前中の授業も無事（授業をまともに受けていたのは姫路と俺と島田くらいだったが）に終わり、俺は明久と雄二と屋上に合流した。

屋上での昼食は清々しい…卓袱台がこんなに役に立つとは、他クラスの設備より良いかもしれない。

食事を何事もなくすませると、雄二が本題に入った。

「明久には宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者って大抵酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ行ってみる。」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている？」

「大丈夫だ、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない。」

俺もフォローを入れる。

「高校生にもなって暴力を振るうバカがいる訳無いだろ。何なら俺が…」

「いや、それは駄目だ。」

しかし雄二は首を横に振った。

「どうして?」

理由は直ぐに分かった。

さっきの有り様を見れば、俺は有名で、士気を上げうるキーパーソンなのだろう。

雄二は極力Fクラスの有する数少ないカードを切りたくない筈。

ましてや成績がBクラス並の俺をわざわざ敵前にさらけ出すなど愚の骨頂、自滅するようなものだ。

雄二は端的に明久にそれを説明した。

明久は納得して、

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ。行ってくる。」

「ああ、頼んだぞ。」

「雄二とけいちちゃんの足を引っ張らないようにするくらいなら僕だ  
って出来るさ。」

明久も中々かつこいいい。

だが…そのやり取りは死亡フラグだ。

.....

「騙されたあつ!」

昼休み終了間際…明久の顔は原型を留めていなかった。

「やはりそうきたか。」

「やはりってなんだよ!やっぱり使者への暴行は予想通りだったん  
じゃないか!」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか。」

「少しは悪びれるよ!」

「しかしお前が生きていたのは予想外だったな。」

「ハナから僕を殺す気だったのかよ!」

「一々喚くな、日常茶飯事だったろうが」

「鈍ってるんだからしょうがないじゃないか！」

流石の明久も2、3年サボれば凡人の拳を捌けなくなるのも仕方がない。

「吉井君、大丈夫ですか？」

明久に姫路が傍に駆け寄る。

「吉井、本当に大丈夫？」

島田も近づいて来た。

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった…。ウチが殴る余地はまだあるんだ……。」

「ああつ！ 突き飛ばされたときに変な打ち方をしたみたいで今になって死にそうな激痛が！」

悔り難し、島田美波。

「そんなことはどうでもいい。放課後にミーティングを行うから逃げるなよ明久。」

雄二は自分の席に戻ると居眠りを始めた。

「あの、痛かったら言って下さいね？」

姫路は午後の授業の予習の最終確認に行った。

「大変じゃったの。」

美女…木下弟が明久の肩を叩いて席に戻った。

「……（サスサス）」

頬をさすりながら康太がそれに続く。

「今日の収穫は？」

「……水色。」

「パーフェクトだムッツリーニ。」

「……感謝の極み（ズパツ）」

やはりムッツリーニは凄腕のカメラマンであったか。

直後、チャイムの音がなった。

…Dクラス戦は明日の午後2時半。

万全の状態で立ち向かうとしよう。

**第3話 バカ達の侵攻！Dクラスへの挑戦（後書き）**

こんばんは。

何とか投稿に辿り着きました。

今回は登場人物紹介2を入れます。



## 登場人物紹介2（前書き）

Fクラスの主要となる男子の変更点について纏めました。

## 登場人物紹介2

土屋 康太（変更点のみ）

・傭兵として様々な任務を行ってきた。中学生時はカメラよりも暗器を持っている事が多く、情報収集よりも暗殺が主な仕事だった。

・身体能力は機動性のみ鉄人に匹敵。残像が残る程の速さで相手を翻弄する。

木下 秀吉（変更点のみ）

・幼少時に《万能演技》を発現し、物真似に関しては、声だけでなく動作や雰囲気まで完璧にこなしてみせる。

・本来の性格は木下姉だけが解放出来る。

坂本 雄二（変更点のみ）

・小型バイクの免許を持っており、たまに翔子と一緒にドライブに出掛けている。

・中学時代は、亮と源二とPTを組んでいた。

須川 亮（変更点のみ）

- ・数十疋もの大鎌を使いこなし、破壊活動や殲滅戦を得意とする。
- ・親友にしてライバルの女性がいるが、避けたいらしく、恋愛感情は無い。だからFFF団団長なのだが。

#### 第4話 作戦会議！Dクラスの脅威（前書き）

問 以下の意味を持つ諺を答えよ。

『？得意なことでも失敗してしまう事』

『？悪い事があつた上に更に悪い事が起きる喩え』

姫路瑞希、松下啓吾の答え

『？弘法も筆の誤り』

『？泣きつ面に蜂』

・教師のコメント

正解です。他にも？なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、  
？なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがあります  
ね。

土屋康太の答え

『？弘法の川流れ』

・教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『泣きつ面蹴つたり』

・教師のコメント

君は鬼ですか。

坂本雄二の答え

『鉢を持っていた明久が木から落ち、鉢を割った上に泣いていたから蜂に目を刺された。』

・教師の答え

君は悪魔ですか。

## 第4話 作戦会議！Dクラスの脅威

視点：明久

初日から一夜明け、昼休みの時間。

授業の内容を覚えることもなく、倦怠感に耐えていた。

昨日の内に回復試験は済ませたけど…焼き芋に水？だった。

雄二が僕達に指針を伝えたいらしいので、今日は皆で屋上に行くことになったのだ。

そして只今屋上への道中をまっしぐら。

「想像以上に酷いもんだな。」

雄二が不満を漏らす。

「地獄絵図だ。あんな設備じゃ誰も勉強する気なんか起こらないだろう。」

啓ちゃんも呆れた様子だ。

「Aクラスの設備は見たか？」

「あれは教室じゃなくてホテルだ。」

僕も話に入ろう。

「そこで、僕が提案したんだ。折角2年生になったんだし、《試召戦争》をやってみない？つて。」

「そうだったな。バカ久にしてはまともな提案だ。」

今更だけど雄二にだけはバカだなんて言われなくなかった。

難しい話は抜きにして欲しいけどさ。

「いやあ、だってあまりに酷い設備だからさ。」

雄二が怪訝そうな顔で覗いてきた。

「全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすつてなあ…ありえないな。」

「酷いこと言わないでよ！僕だって、興味がなければこんな学校になんかいかないさ！」

雄二は欠伸をしながら啓ちゃんを見る。

「明久がこの学校を選んだのは、試験校故に学費が安いという理由が大きい。」

ぐっ…お見通しだ、啓ちゃんにも喋ったこと無いのに。

バカ雄二ならまだしも、啓ちゃんは賢いし僕のことをよく知っているんだつた。

「白状しろ。どうせ好きな女の子に好かれたいが為に成績だけでも上げようって魂胆だろ？」

雄二は鋭い！だが甘い。

究極の嘘について隠し通す！

「あー、えーっと、それは、その…姫路さんの為なんだ！」

沈黙。

雄二はポカンとした。

啓ちゃんは恥ずかしそうにしている。

僕は何かが終わった気がした。

「雄二、今の無し。」

無しにしてくれる程の脳を雄二は持っていない。

「雄二…明久はこんなに面白いことを言い漏らしたけど…こ、ここのうのは？」

啓ちゃんがデレデレした様子で額に手を当てる。

「あ、ああ、驚いた…理由を言い当ててやろうと思ったが…こんなにストリートに言うとは…明久らしいな。」

、一番知られたくない二人に知られた…もうお嫁にいけない！（）



「T | T」)

「そ、それより…明久が姫路の為に戦争を起こそうとしているのは分かった。大方振り分け試験のときに姫路が倒れてFクラスになったのをバカ久が聞き付けたか助けたかしたんだろ。」

見事に言い当てられた。

「だから明久は姫路にAクラス環境にいて欲しいと…かつこいな。雄二もホントは全部知ってて尋ねたな？」

「まあそんなことだろうと思っていた。だが理由はどうであれ、俺も戦争をやりたいと思ってる所だったし、勝てる作戦も思いついたからな」。明久に乗ってやってもいい。」

この発言は意外だ。

「え？どうして？雄二だって全然勉強なんてしてないよね？」

「世の中学力だけが全てじゃないって、証明してみたくてな。勉強だけ出来る奴等の鼻を明かすのも悪くない。」

何だか分からないけど凄いや。

啓ちゃんが微笑んで後ろを指差した。

振り返ると須川君と秀吉とムツツリー二が手を挙げて振っていた。

僕は暫く立ち止まっていたけど、直ぐに皆を追った。

.....

視点：啓吾

雲一つない空から眩しい光が春風とともに突き差されるのを気持ち良く感じる。

「さて、五時間目の後は戦争だ。」

雄二はそう切り出した。

「一応今日の午後２時半に開戦予定と告げてきたよ。」

明久は元気良く応じる。

「じゃあ、先に昼御飯を済ませるかのう」

「……栄養補給は大事。」

「そう思っならパンでもおごってよ。須川くん。」

「お前に金をかけるくらいなら溝に投げる。」

「マジ！？ばかぁ嬉しいよー！」

拾いにいくんかい！

明久とは対照的に、木下弟は真剣な眼差しだ…透き通った瞳の奥から熱いハートが垣間見える。

俺は明久に、

「明久…いくらまともに食べられないにしても、クレクレ厨の真似は…」

「明久。自業自得だ。」

雄二の言う通りだ。

「雄二…何が言いたいのさ。」

「お前の主食って…水と塩だろう？足りるのか？」

「失礼な。きちんと砂糖だって食べてるさ！」

水と塩と砂糖って、食べるとは言わないぞ…。( ; ; )

「舐める、が表現としては正解じゃろうな。」

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いんだよな。」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

明久も俺の両親が仕事の都合で海外にいる為、一人〜二人暮らしをしている。

親からの仕送りはあるが、その大部分はゲームや漫画に消える。

「明久：綺麗な美人さんと住んでいるのに、どうしてこうなるんだ。」

「（ガタツ）吉井、返答次第ではクロス」

「待つんだ須川くん。僕が、塩と砂糖以外のものを有している筈がないじゃないか。啓ちゃん変なこと言わないでよ！」

「確か：3-Aの《佐山 曉美》じゃ無かったか？」

雄二、ナイスアシスト。

「フーズイット」

俺は2、3年前から彼女と明久と何度も遊びに行ったり勉強したりしている。

須川の殺気を感じたのか明久は汗だくだ。

「……5W1Hの文末のイントネーションは」

康太の的確な突っ込みに明久はテヘッ っとした。

「松下。吉井を殺したいんだが。」

「落ち着け須川。ムツツリーニが調査した結果だと、明久は1%くらいギリギリセーフだ。」

「ツチ。異性行為を発見次第吉井を社会的に抹殺する。松下、観察をお願いする。」

雄二が声を荒げ、卓袱台を叩いた。

「お前らなあ。話をずらすな。作戦会議するぞー。」

「……居候プレイ。グハアツ！」

ムツツリーニ は たおれた

めのまえが まっくらに なった

「松下。バカはほつとくぞ。」

「うむ、わしらだけでもDクラスを倒す方法を考えるのじゃ。」

「ええ、木下ー」

「秀吉で良いぞ 啓吾よ。」

呼び捨てにされた拳げ匂に啓吾呼ばわり…最高じゃねえのお！

「さてと、皆の回復試験は殆ど終わった。後は松下と姫路が何科目か終わっていないくらいだな。思ったよりも回復のスピードが早い。感謝しねえとな。」

きのs…秀吉が疑問を投げ掛ける。

「雄二よ。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなのじや？段階を踏んでいくのならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「その事に関しては当然考えがあつてのことだ。」

「考えとはなんじやろうか？」

「色々と理由があるんだが、とりあえずEクラスを攻めないのは簡単だ。戦うまでも無い相手な上に、メリットが無い。」

幾らなんでも無茶だ。姫路や俺はまだしも、後の面子は雄二以下だ。

試験の点数で振り分けを行われているので、Eクラスは俺達のFクラスより点数は高い。

「だとしてもFクラスとEクラスの平均の差はせいぜい200点程度、姫路と松下の敵じゃない。」

「つまり、お主はAクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦つても意味が無いって言いたいのじやな。じやがDクラス以上は真つ向勝負だと流石に厳しい…そういうことか？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

俺も進言する。

「なら尚更Eクラスに挑んだ方がいいんじゃないのか？」

雄二は首を横に振る。

「駄目だ。初陣でEクラスを狙うようじゃ、あいつらに『やはりAクラスは無理なのか』と思われてしまう。そうならないように明らかに格上のDクラスを派手にぶっ潰して、今後の景気づけにした方が、土気は上がる。これは言うまでもなく、打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだ。」

成程。

秀吉は、

「その話、Dクラスに勝てなかったら意味が無いわけじゃな？」

「負けるわけ無いさ…本気になったFクラスに叶う奴なんかいると思うか？ま、お前らが俺に協力してくれるならの話だが。」

「とはいえ相手は格上じゃ。気を引き締めていかねばならぬのう。」

雄二は不敵な表情で笑う。

「俺らのクラスは最強だ。何故なら、お前らがいる。俺を信じる松下、中学時代に潜って来た修羅場を思い出せ。」

ああそつだ、忘れていた。

ここにいるのは…いい感じにネジのぶっ飛んだ親不孝者ばかりじゃないか。

「こつなつたらやるだけやる。雄二…俺を使いな。」

「勉強する。足を引っ張らぬようわしも頑張るのじゃ！」

戦いが始まる。

違った目的を志しながら、一つとなったFクラス。

打倒Aクラス。

「作戦は2時に説明する。」

ここに、最下層（Fクラス）が最上層（Aクラス）に対する下克上が始まった。

…あそこで戯れている3人は何しに来たんだろう。

- - - - -

視点：?????

「2・Fが新学期二日目から戦争か…。」

「Dクラスと殺るらしいね アンタはどっちが勝つと思う?」

「さあな。FクラスもDクラスも化物ばかりだし、荒れるんじゃないかな?」



「ああ、あの化物共がね。こわいもんだねー。」

「お前の方が恐いな…。」

「そーかな？アンタの頭の中身の方が余程ブツ飛んできると思っけど。」

「言ってくれるな。しかく楽しくなって来たじゃないか。」

「一心不乱の大戦争が出来るんだ…何でもありだね。」

「血が騒いで来たようだな？」

「アンタはどう？」

「昔から行動しないのは性に合わないタチだし…動き出すとしよう。」

「まっお手並み拝見といくよ。そしてその暁には…。」

「そうだ相棒。あいつらをあいつらを、かつて敗北に追いやり全てを失った俺達のように追い込み、酷いことをしてやるうぜ。なあに、急ぐことは無い、3年待ったんだ。数時間、数日、数ヶ月待つ事などどうということはない。今に見ている…恐怖に沈めてやる…クッククツクツ、ハツハツハツ…！！！」

#### 第4話 作戦会議！Dクラスの脅威（後書き）

本日二話目の更新です。

いつの間にかPV3000、週間アクセス3000を達成しました。

これからも本小説をよろしくお願いします。

## 第5話 Dクラス戦開幕！バカ達の初陣（前書き）

### 問題（数学）

以下の問いに答えなさい

(1)  $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$  の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する  $X$  の値を1つ答えなさい。

(2)  $\sin(A+B)$  と等しい式を示すのは次のどれか、??の中から選びなさい

$$? \sin A + \cos B$$

$$? \sin A \cos B$$

$$? 3 \sin A \cos B$$

$$? \sin A \cos B + \cos A \sin B$$

姫路瑞希、松下啓吾の答え

$$(1) X = \frac{\pi}{6}$$

$$(2) ?$$

・教師のコメント

そうですね。角度を『 $\pi/6$ 』ではなく『 $\frac{\pi}{6}$ 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

(1) X II およそ3

・教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

(2) およそ？

・教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

須川亮の答え

(2) オーディエンスを使います！

・教師のコメント

これは某四沢クイズ番組ではありません。

坂本雄二の答え

(2) テレフォンを使わせてもらおう。

・教師のコメント

試験中に電話するのは禁止です。

## 第5話 Dクラス戦開幕！バカ達の初陣

視点：啓吾

- 14 : 15 Fクラス -

試召戦争の準備も無事に済んだ。

雄二はクラス全員を再集結させた。

「今からDクラスを潰すが：厳しい闘いになるだろう。だが俺はお前らを百戦錬磨、一騎当千の強者と信じる！」

雄叫びを上げるバカども。

「そつだ！俺達がFクラスだ！」

「ここには姫路さんがいるんだ！」

「秀吉いい！俺と付き合ってくれええ！」

「島田！俺と結婚してくれー！」

誰かは知らんが、秀吉を貰うとは良い度胸だっ！

雄二は続ける。

「今回はクラスを突撃部隊、中堅部隊、近衛部隊、情報収集班、予備戦力の5つの部隊を作らせてもらう。割り当ては既に決めてある。」

注目しろ!!!」

雄二は黒板大きな紙を叩き付けた!

<突撃部隊>

人数：15人

主力：啓吾、明久

概要：一人でも多く道連れにしろ!死にかけたら撤退し、回復試験を受け次第何度も突っ込め!

<中堅部隊>

人数：15人

主力：秀吉、島田

概要：突撃部隊を支援し、回復試験をする時間を稼ぐ!

<近衛部隊&代表>

人数：10人

主力：雄二

概要：俺を護れ。むやみに突っ込むな!

<情報収集班>

人数：5人

主力：ムツツリー二、須川

概要：敵の戦術を盗撮盗聴せよ!

<予備勢力>

人数：5人

主力：横溝

概要：全部隊への支援、回復試験の迅速を図れ!

明久が手を挙げ質問する。

「どうして主力に姫路さんを入れなかったの？」

「姫路はまだ全ての教科を回復していない。一応近衛部隊の所属になるが、出番は0に押さえるつもりだ。」

「……雄二は敢えて啓吾を最前線に入れ、姫路がFクラスに存在しないように見せかけるつもり。」

明久は俺を見て成る程という顔を見せた。

明久と俺は最前線か：雄二としては俺に点数の高い科目で勝負させ、敵の戦意を喪失させようとしているんだな。

数より質が重要になる試験召喚戦争では、基本的に下位クラスが不利となる。

だが質は点数だけで決まるのではない。

高度な連携、適材適所への配置、奇抜な作戦が噛み合う事が絶対だ。

雄二は俺の肩を叩く。

「基本的に俺の指示に従ってもらおう。だが戦争は現場で起こる。俺はお前を助けるつもりない：突撃部隊はお前と明久に任せきりにする。頼むぞ。」



「了解…基本的に独自に行動するが、お前が奇襲された場合はどうすればいい?」

「俺が奇襲されるまでに敵の代表の首を獲れると思うんだが。」

「無理難題を言うな。」

「自信が無いのか?」

俺は震える右腕を押さえる。

「まさか。武者震いだ。」

「お前は隊長だ。職人の手解き、見せてもらう。」

「ああ…期待に応えるくらいに頑張らせてもらう…しかし負担が重いな。」

「お前の力の高さはよく知っている…並の働きでは許さん。」

「…ッ。試されるのは好きじゃないが、良いプレッシャーだ。突撃部隊だけで勝つつもりでいかせてもらおう。」

俺は雄二と拳をぶつけ合った。

雄二は主力を全員呼び、最終調整に入る。

「まずは松下率いる突撃部隊がDクラスと殺り合う。秀吉のいる中堅部隊は状況を把握しつつ援護しろ。ムツツリー二と須川は情報を

集める。近衛部隊と予備勢力はここで待機しろ！」

「合点承知じゃ。」

「……了解。」

「ムツツリーニの援護なら任せてくれ。」

「頑張つて援護するよ。」

秀吉、島田、ムツツリーニ、須川、横溝は部隊に指示を出しに向かった。

「松下。お前も逝つてこい。」

「征くさ……死ぬなよ。」

俺は明久とDクラスのある方向を見る。

チャイムが鳴り響く。

Fクラス対Dクラス……火蓋は静かに、激しく切つて落とされた！

.....

視点：源二

俺は清水さん、塚本君、そして美紀に協力してもらい、対策を講じているものの、深刻な情報不足に頭を抱えていた。

開戦時間まで20分も無いというのに、決定的な作戦が立てられない。

加えてクラスメイトの殆どが格下との戦いが面倒なのか、熱意を感じられない…。

美紀は心配そうに俺にお茶を出す。

「Fクラスが相手とは言え、コンディションは最悪だね…。」

「うん…降伏しようかな？」

「代表がそんな弱気じゃ駄目だよ。アキちゃんが可愛いと言つことと、坂本君が元《神童》って事くらいは知ってるし。」

俺が美紀と喋っていると、清水さんが紙飛行機を飛ばしてきた。

紙を開いてみるとそこには情報が記されていた。

< Fクラスについて >

・ Fクラスは殆どが豚野郎ばかり。女性といえばドイツからの帰国

子女が1人いるくらいですが…よく知っている人なので、美春に任せてください！

・豚野郎は大嫌いですが、過小評価は出来ません！徒党を組んだ姿は…厄介極まりない上にキモいんです！

・貴方も知っているとは思いますが、あの代表にくつついている土屋と須川は要注意です！あいつらの戦闘能力は並ではありません…美春も相応には鍛えてはいますが、苦戦は必至でしょう。

追記：あの豚共は隠すのが上手く、これ以上暴かせてはくれませんでした。美紀さんよろしく伝えておいてください。

「清水さんは凄いな…。」

美紀は感服している。

「ふう…塚本君を囿にして土屋を引き付ける作戦は成功したみたいだね。」

「アキちゃん、坂本君、須川君、土屋君…中学時代にケンカばかりしていた人ばかりだね。」

美紀は吉井の写真を俺に見せる。

俺は頭を抱える。

「成績ならこっちの方が高いけど、人材はFクラスの方に流れちゃ

つたみたいだね。この有り様じゃ、他にも危険人物が居るんじゃないかと思ってしまうよ。」

「奇遇だね、私もそんな気がするよ…。」

嫌な勘が当たらなければ良いが。

「でも…面白い戦いになるんじゃないかな？」

美紀は楽しそうにする。

「面白い？君が楽しむのはいいけど、負けられない勝負なんだから…美紀は勝負事になると盲信的になりがちだから敢えて注意させて貰うよ。」

「痛い所を突いてくるね…。」

苦笑いする美紀に俺は頬杖をつく。

「でも頼りにしてるよ。中学時代に何度も助けてくれたんだから…クラスメイトの皆もきつと協力してくれる筈だし、頑張ろう！」

美紀は笑顔を見せる。

ここで俺はふと思い出すように彼女に尋ねた。

「ところで美紀。Fクラスの使者をボコボコにしたのはいいけど、脅して吐かせた方が良かったかな？」

「うん。私の制止を振り切って皆アキちゃんをタコ殴りにしたし、

どっちにしても吐かせられなかったと思うよ。」

「だけど代わりに吉井君の腕が落ちている事は知ることが出来た。」

「一見ハイリスクローリターンだけど…実は大きいよね。」

「ああ。俺と美紀は今も変わらず、厳しい修行を続けているからね…  
…皮肉にも彼等の奇襲に対応は出来る。」

「私達だけじゃないよ。昨日の内にクラスメイトの肉体を観察していたけど、清水さん、塚本君、後は…仲沢さんとか面白いね。」

「仲沢さん？」

「うん。窓側の一番後ろの席に座ってる子なんだけど…。」

「ああ。転校してきた子だね…ちょっと来てもらおう。」

俺は仲沢さん？と呼んだ。

ヒュバツ、トタツ

「私に何やか用かいな？聞かれたら直ぐに答えるのが義理ってもんやね！」

！？

美紀は仕込み棒を手に彼女を威嚇した。

ざっと10mは飛んだか。

バイオレンスな雰囲気を持つ仲沢さんはニツと笑い話し出した。

「おったまげるんは仕方無いや。さつき自己紹介した通り、わては今年の春に大阪から引越してきた《仲沢好美》ちゅうんや。いきなり脅かしてすまへんなあ…せやけどダンさんら中々の腕やな。驚いたで。」

茶色と金色の混ざった髪を1つに束ね、170cm程の仲沢さんはニツツとする。

「驚いたのは僕たちだよ。」

「堪忍なー。こないなことが日常茶飯事のトコに住んどったから、これが自然体になってしもたんや。」

「仲沢さん…大阪は危ない場所なの？」

「ちやうちやう・食べ物はずまいしい、皆好人ばかりやで。」

美紀は溜め息をついて仕込み棒を仕舞う。

「源さん…この子も私達と『同じ』みたいだね。」

「ああ…清水さんだけでも大変なのに。」

仲沢さんは少し焦った様子で、

「まさか…怒つとる？」

「うづん、どつって事ないよ。」

美紀が俺を見て返答する。

仲沢さんが美紀の両手をパシッと優しく握った。

「あんた…怖ないん？わては不束でちーとばかりし身体が先走る性格やねんで？」

「怖くないよ。むしろ大歓迎だよ。」

「おおきに！あんたとは上手くやれそうやわ！よろしゅうな！」

仲沢さんは安堵した様子で俺を見る。

「ええーっと…代表はん。何用やったつけ？そうそう、好美って呼んでええよ。」

俺は席を立ち上がり、美紀に、

「いい作戦を思い付いた！清水さんと塚本君を召集してくれ！」

「はいはい。好美ちゃん…こつちこつち」

美紀は好美さんと手を繋いで清水さんの元へ行った。

俺もその直ぐ後に二人を追い掛けて行った…。

色々楽しくなる…俺の勘がそう示した一時であった。





「なッ何よ（＾―＾；）」

島田さんは思わず動揺する。

「ああ胸か。」

「アンタの指を折るわ……。小指から順に全部綺麗に（こき、ばき）」

僕が言い張ると島田さんは攻撃態勢を取った。

啓ちゃんが怒鳴る。

「試召戦争に集中しろ！」

島田さんは仕方がない様子で教室へ戻って行った…助かった。

今現在、最前線にいるのは啓ちゃん率いる突撃部隊で、その遙か後方に秀吉が待機している。

「いたぞ！Fクラスだっ」

「叩き潰してやる！」

「Dクラスか！押しきるぞ！」

「秀吉を守るんだあああ！！！」

召喚フィールドが拡がり、交戦状態になった！！！！

<数学>

「2 - F : 突撃部隊A」 67点

「2 - F : 突撃部隊B」 61点

V S

「2 - D : 前線部隊1」 103点

幾らDクラスの生徒でも2VS1では勝ち目は無い！

<数学>

「2 - F : 突撃部隊A」 45点

「2 - F : 突撃部隊B」 24点

V S

「2 - D : 前線部隊1」 0点

「0点になった戦死者は補習ううううう！！！！」

「げツ鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだ！」

「黙れ！捕虜はこの戦争が終わるまで特別講義だ！何時間かかるかわからんがたっぷりと指導してやる！！」

「鬼の補習は嫌だ！たツ頼む！見逃してくれ！あんな拷問は耐えられない！」

「あれは立派な教育だ。終わる頃には趣味が勉強で尊敬する人は二宮金次郎といった理想的な生徒に仕立て上げてやるから覚悟しろ！！」

「鬼だ！誰か助けッ、イヤアアア・・・」

よし！このまま一気に行く！

「無駄な足掻きを！」

「点数が高いだけで勝てるかよ！」

<数学>

「2 - F : 突撃部隊 A」 0 点

「2 - F : 突撃部隊 B」 1 4 点

V S

「2 - D : 前線部隊 2」 4 1 点

「2 - D : 突撃部隊 3」 8 1 点

「2 - D : 突撃部隊 4」 9 7 点

仲間が 1 人やられたか…流石に避けきれない！

啓ちゃんが大声を出す！

「そのこの 3 人に数学で挑む！試験<sup>サモン</sup>召喚！！！」

「松下が F クラス！？」

「怯むな！多対一に持ち込め！」

「させるか！まっさんを援護する！」

僕も啓ちゃんを援護しなきゃ！

<数学>

「2 - F : 突撃部隊 B」 4 点

「2 - F : 松下啓吾」 3 1 4 点

「2 - F : 吉井明久」 5 7 点

「「「何だあの点数は!?!?!」」」

3 対 5 か…だが得意科目なら啓ちゃんは負けない!

啓ちゃんの召喚獣が相手に投げられる!

相手も凄い…ナイフに当たりながらも啓ちゃんにダメージを通す!

だが甘い!僕は「F 突 C」と共に点数の殆ど無い召喚獣に止めを刺した!

< 数学 >

「F 松下」 1 7 2 点

「F 突 C」 3 8 点

「F 吉井」 4 1 点

啓ちゃんは死にかけている「F 突 B」を逃がす。

残りの D クラスの前衛 4 人の後ろから援護と思われる生徒たちが 5 人来た!

啓ちゃんとたち僕は数学フィールドを放棄し、保健体育フィールドに後退した。

< 保健体育 >

「F 松下」 3 0 8 点

啓ちゃんの高得点にDクラスの生徒は攻めあぐねる。

これに乗じて僕たちも啓ちゃんを援護し、相手の前線部隊を殲滅した。

「明久！7人やられた！F突の8人は回復試験を受けて来い！」

啓ちゃんは数学と保健体育のフィールドを消してもらい、今度は日本史のフィールドを展開してもらった。

僕は駆け寄って、

「啓ちゃん！作戦は無いの？」

「無い！日本史フィールドを消したらたちまち俺の苦手教科で奴等が流れ込む！そうなたら数秒もたない！」

Dクラスも中々だ…だからこそ作戦を思いつく！

「啓ちゃん。突撃部隊全員に通達。」

啓ちゃんは汗を吹いて振り向く。

「？」

僕はこう告げた。

「啓ちゃん以外総員退避！」

殴られた、…チヨキで。

「目がツ目があッ！…！」

目潰しされた哀れな僕は地面にのた打ち回ざるを得ない。

「目を覚ましなさい、この馬鹿！…！」

「島田、流石にやりすぎだ。」

いつの間にか島田さんが戻って来ていた。

「部隊長が臆病風に吹かれてどうするのよ！…」

その覚ますべき目に激痛が！！せめてグーかパーで殴って！

僕は震えながら号泣する。

せめてビンタでお願いします。

「いい吉井？あなたの役割は出来るだけDクラスを惹き付けて前線を維持する事ですよ！」

島田さんは再度、僕に作戦の内容を述べる。

「あなたが逃げたらあいつらが補給出来ないじゃない！」

「このバカ久！」

島田さんも啓ちゃんも呆れている。

僕も流石に思い直した。

「ごめん…僕が間違ってたよ…この戦闘に勝利することだけ考えよう！」

「ええ！それに個別戦闘は弱いかもしれないけど、多対一で戦えばきつと大丈夫！」

「そうだね。よし、やるぞ！」

「その意気よ、吉井！」

僕はやる気を出す…が、

『……明久、啓吾、島田！Dクラス側の前衛に援軍が15人来ている！』

ここでムツツリーニから戦況の報告が入った。

……。

「総員退避よ。」

島田さんは退避命令を出した。

「問題ないわね？」

さっきと言ってる事が全然違うよ？



しかし僕もそうだと思った。

「仕方無いよ。僕らでは荷が重過ぎた。」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ。松下…。」

「言えば補習は大嫌いだ。死にたくない。」

3人の意見が一致、逃げよう。

そこへ横溝が報告しにきた。

「代表より伝令があります！」

どうやら雄二からの伝言のようだ。

「『逃げたらクロス、近衛部隊総出でな！』と！」

now loading….

「全員突撃しろおおおおッ！！！」

「逝くしかないよな明久ああああ！！！」

「その意気よ吉井！松下！」

踵を返す僕と啓ちゃん、島田さん。

秀吉も合流する。

「生きておったか！良かったのじゃ。」

秀吉は嬉しいのか、いかにも女の子らしい表情を見せた。

「秀吉、いつも可愛い…。大丈夫？」

島田さんと啓ちゃんは啞然としている…。

「わしは無傷じゃが…お主らの点数がかなり削られてしまっておるぞ。」

今の状況はかなり点数が消耗した状態のようだ。

「これ以上の戦闘は無理じゃなかるうか」

「じゃあ、早く戻ってテストを受け直さないといけないね。そうしないとすぐにやられちゃうし。」

「そうじゃな…。時間的に一、二教科がいい所じゃな」

啓ちゃんも納得した表情だ。

「明久。俺は此処を死守する。俺がやられる前に戻ってこいよ！」

僕はすぐに点数を補充するために補給室へと向かった。

- - - - -

視点：啓吾

戦争開始から45分経過した。

明久を始めとするの突撃部隊8人が帰還した。

中堅部隊は6人戦死、重症5人とかかり削られたが、フィールドを世界史に変更、何とか前線を守りきり、予備勢力、情報収集班の援護もあり、犠牲者を出しつつも新校舎と旧校舎を繋ぐ渡り廊下をぶんどった。

土屋によれば、残存兵力はこちら31人、相手は24人：まだ油断出来ない。

やがて中堅部隊も回復試験を受け、島田だけが戻ってきた。

「試召戦争のルールは覚えてるか？」

俺は念のために明久に試召戦争のルールを確認させる。

「その科目の教師がいないと召喚は出来ないからね。」

俺と明久は新校舎へ差し掛かる。

試召戦争には色々なルールや制約がある。

とその時、ムッツリーニから連絡が入る。

『……緊急事態発生！Dクラスが五十嵐先生と布施先生を引っ張ってきた！松下は即後退！』

グツ…苦手教科か！

「島田さん、化学に自信は？」

「全くなし。60点台常連よ」

「啓ちゃん！」

「無理だ…50点もない！」

「じゃあ五十嵐先生達に近付かないように学年主任の所へ行こう！」

「高橋先生ね？了解！」

そして急いで高橋主任の所へ移動しようとしたが…。

カッカッカッ…。

ゾクッ！

な、ん、だ？

足音が近付いてきた。

明久はポケットから棒切れを取り出す。

足音が消える。

「豚野郎…御姉様を汚す男は全て排除します！」

遂に出てきたか…Dクラスの主力にして危険人物…その名も《清水  
美春》っ！！！！

## 第5話 Dクラス戦開幕！バカ達の初陣（後書き）

更新が遅れました。

駄文が多いのに、長く書きすぎた><

それでも読んで戴けるんですね…本当に有難うございます！

次回もお楽しみに！

第6話 迫り来るDクラスの強者たち！（前書き）

化学

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『 $C_6H_6$ 』

・教師のコメント

姫路さんには簡単でしたかね？

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

・教師のコメント

君は科学を舐めていませんか？

吉井明久の答え

『B・E・N・Z・E・N』

・教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように

。

松下啓吾の答え

『B・E・E・N・N・N』

・教師のコメント

並び替えればいい話ではありません。

坂本雄二の答え

『ベ・ン・ゼ・ン』

・教師のコメント

あとで四人で職員室に來なさい…補習！



## 第6話 迫り来るDクラスの強者たち！

視点：啓吾

「吉井、松下…。」

俺は唇を噛み締める。

「ああ…五十嵐先生と布施先生は化学教師だ！」

二年の化学を担当する両教諭が新校舎手前の渡り廊下に立つ。

化学は俺の苦手科目…奴ら気付いたのか？

「島田さん、啓ちゃん…」

明久は弱気になる。

「五十点も無い。」

「同じく。六十点台常連よ！」

お世辞にも良い点数とは言えないな。

「学年主任の高橋先生の所まで逃げようかな。」

「総合科目なら尚更勝てない。ここまで来て、逃げていまえば旧校舎で疲弊している中堅部隊をさらけ出す事になる。それに見上げてみるよ…俺達を返す気は無いみたいだぞ。」

明久と島田は天井を見た。

「嘘……。」「」

スタツ

「美波様。お久し振りです。」

「出来れば会いたく無かったわ。美春。」

「ふふ。強く美しい御姉様を慕い続けて1年。今日こそ美春が貴方をオトしてご覧に入れましょう！」

「

廊下の天井を這って来たのか。

理性が吹き飛ぶ。

「明久さあああ！島田を連れて教室に行けー！ツ！！！」

驚く2人だったが、明久は頷くと島田を抱え、全速前進で走って行った。

これでいい…。こいつはここで！倒しきる！

「ああ！麗しきお姉さま、待って！」

俺は遮る。

「俺が相手するよ…清水！」

空気が変わった。

清水は憎しみの籠もる目で睨む。

「ふん…醜い豚野郎の分際で美春と御姉様の恋路の邪魔をしないでくれませんか？」

「残念だが、お前を止める必要があるんでな；試験召喚<sup>サゼン</sup>！」

銃剣と大きな日本刀を持つ俺の自慢の召喚獣が出現する。

清水は舌打ちした。

「しっかりルールは守らないといけないよな…隠し持っているフォークは捨てる！」

「気付いていたんですか。知らなければ教師を呼ばずに始末出来たんですが…。」

チャラチャラ！

清水は十数本のフォークを床に落とす。

「さて、どうする？補習室に行きたいなら勝手にしろ！」

試召戦争のルールの1つ…それは『相手が召喚獣を喚び出したにも関わらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける』という内容だ。

つまりこのまま奴が通り過ぎれば戦闘を放棄と見做され戦死者扱いとなり補習室へ連行される！

「美春の愛を邪魔するのですから、潰させてもらいます！試獣召喚！」

清水の召喚獣：西洋の刀と盾。

<化学>

「2・F：松下啓吾」47点

VS

「2・D：清水美春」95点

ダブルスコアかつ。

「ふ…噂には聞いていましたが、大した点数じゃないですか！」

「点数だけで決めれば戦争の意味は無いと思うがな！」

「ならやってみなさい…豚野郎があ！」

清水の召喚獣が剣を振りかざし俺の召喚獣を襲う。

ゴッ

「先手必勝…と思いましたが、武器の弱点は網羅しているようですね。」

清水のソードが空を切る。

「バックラーとブロードソード。バックラーは小さいが機動性が高い…防御は難しいが自分から接近し相手の剣に当てる事で、従来の欠点である死角を消すことが出来る。」

当然相手の攻撃を正確に読んで当てていく技術が要求される。

こいつ化物か！？召喚獣を操作するのは今年初めてだろ…なんだ？

まさか…一桁でゴリラ数匹分の戦闘力を有する召喚獣に身体能力が追い付いているというのか？

後ろに下がりがわし切ったが…や、ば、い！

俺は召喚獣を操作し、刀を抜く。

「豚の割には生意気に、頭腦的な方ですね。ゴリラに昇格して差し上げましょう。」

「嬉しくないな。俺はバナナは好きじゃないんだ！」

冗談言ってる場合か！満身創痍だボケ！

「はああっ！」

清水の連撃が始まった。

キンツキンツガッ！

「グッ…ちいい！」

防戦一方だ…清水は西洋剣のハウツーを知っている！

後ろに下がるだけではいずれ召喚フィールドの壁にぶつかってしま  
う！

ブロードソード&バックラー…知識はあるがこんなに使いこなせる  
使い手が居るのか…化物め！

思い出せ、知識を！

確か…右手に剣を握り、その拳の上にバックラーを被せるように持  
つ。

基本戦術…『小さな盾は遠くに構える』原則は、籠手を必ず護る事  
を意味する。

仮に籠手以外のところを狙おうとしても、俺は数十cmまで間合い  
を詰めねばならない。

日本刀はそこまで間合いを詰めなくても相手を装甲ごとぶった斬れ  
るが…バックラーによって手の内が隠されている以上、『構えてか  
ら斬る』動作に要する隙を作ることを許さない！

「はあああああっ！」

清水は怒る事で闘気を上昇させている。

怒りは冷静さを奪い攻撃を単調化すると言われているが、言い換え  
れば、こちらにとって不利な手段を繰り返される事と化す。

その道に携わる達人ならば、同じ手は通用しないのだろう。

だが俺は近接武器を造れるだけで、知識はあっても、実行出来る体力は無い！

「いい加減に美春の餌食になりなさい！」

俺は日本刀の鞘で受ける…西洋刀は斬れない刀だ！

だが何しろ位置が高すぎる…顔面を守る為に日本刀を顔の前に上げるしかない。

膠着が続く。

様子を見るべく刀を下げれば、もう一撃くる…突きを顔面に入れたら即死だ。

だが…片腕で受けられたのならばあ！

バキィィィ！

一瞬の刹那！

俺はナイフをクナイのように投げ、清水のバックラーを真つ二つに  
した！

「こんのおーっ！Fクラスがあああ！」

…カランカラン。

日本刀を叩き砕かれたがな。

「く、くそ…。」

「ここまでよくやったと褒めましょう…あなたの負けです。」

清水は召喚獣に両手でブロードソードを持たせ、俺の召喚獣の元へ歩かせる。

ツーハンドソードか。

清水は冷徹な表情で現実を突き付けた。

「チェックメイトです。」

俺は目を開け言い放つ。

「ああ…覚悟は決まった。」

清水は剣を構え振り上げる。

「かかったな！その致命的な隙を見せるのを待っていた…清水美春！」

「何を根拠に…はっ！」

清水の焦り。

唯一彼女が気付かなかった誤算。



「お前は俺にフォークを仕込み、明久と俺を始末しようとしたよな…隠していたのはお前だけじゃ無いらしいぜ？」

点数差に関係なく急所…頭、首、心臓を貫けば召喚獣は即死する。

だからちよつとした武器でも殺しきれぬ。

清水は召喚獣を操作し俺から離れようとする。

バカが！ブロードソードは重い…振り上げた反動でお前の召喚獣は海老反りになって姿勢を崩す！

「しまつ「うおおおおー！！！」

落ちていたナイフを拾い、清水の召喚獣の首へ突き刺す！

「形勢逆転だな清水。一つ言い忘れていた…他に武器は持ってないつて事。嘘ついてごめんな！」

俺は気さくに清水の召喚獣に止めを差し、その場に座り込んだ。

清水は悔しそうな表情でフォークを拾い集める。

「ハツタリも使えよう。ポーカーフェイスの基本だ…覚えときな。」

「…次は勝ちます。勝って御姉様を戴く日まで美春は諦めません！飯は返しますから首洗って待っていなさい！」

「うるさいなー早く補習室に行けよ。」

この後、突如として現れた西村教諭に清水は補習室へと連行されて行った…。

俺はその場で寝転んだ。

「はあ、はあ、はあ… 全体力を使い切った… 帰るか。」

<化学>

「2・F：松下啓吾」4点

俺はフラフラな足取りでFクラスに戻るのであった。

- - - - -

Fクラスの教室に帰還した俺は畳の上で寝ていた。

「松下… 清水を撃破したそうだな。」

「何とかな。もう疲れたよ。」

「そうか、そいつは結構だ。」

「少しは誉めてくれよ…。」

「めんどくせえな。まあ、清水を倒した事は感謝しよう。少し休め

…島田と秀吉は頑張ってくれているし、時間はある。」

「雄二…明久は？」

「明久は島田に羽交い締めになったのを理由にサボりたいと言ったから、《逃げたら49人でランチする》と言って脅した。」

明久…強く生きろよ。

雄二と談笑していると、須川が駆け込んできた。

「坂本、松下！吉井からの伝言だ！先生たちに偽情報をながしてくれ、と。」

相当苦戦しているのか…Dクラスも必死になってきたな。

俺は会話に参加せずに黙って聞く。

「時間稼ぎか…ムツツリーニ！」

「……ここに。（シユタ）」

「Dクラスが呼んだのは誰だ？」

「……船越先生。」

「そうか。だったらこれを校内放送でながせ。」

須川が確認する。

「ほお。イカした作戦じゃないか。行ってくる！」

雄二が渡した紙を見た後、須川はとてつもなく笑顔になって教室をでていった。

「雄二、お前は何を渡したんだ？」

「そうあわてるな、そのうち嫌でもわかるさ」

「まあ、お前が言うなら期待する。」

俺は鞆を枕がわりにして寝ていると、

《ピンポンパンポーン》

校内放送だ。

「お！来た見たいだぞ」

《船越先生、船越先生》

この展開は…。

《吉井明久が体育館裏で待っています》

「」「」「ぶっ！！」「」

眠気が吹き飛んだ。

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

「「「「「わはははははっ!!」「」」」」」

「グツジヨブ!須川。最高の仕事だったぜ!」

哀れなり明久: 幸せになれよwww

「ま、松下: ひら、秀吉に状況聞いて、きて: く、くくく!」

雄二達は、突撃部隊を回収すべく教室を出ていった。

俺は飛び起き、秀吉の元へ向かった。

.....

「秀吉。姫路の回復試験は?」

「えっと、あと一教科: 30分ぐらいで終わるそうじゃ。」

この調子なら彼女が出るまでもないな。

「そうか: 明久が近衛部隊を引き付けている間に、俺が代表を潰せば、彼女の存在を隠し通せるな。」

「お主の点数なら近衛部隊もろとも倒せそうだと思うのじゃが。」

「無理だな。」

「過小評価するのう。得意教科ならばAクラス最上位クラスではないのかの？」

「…本当の敵は点数の高い奴じゃない。」

「まさか…ワシ達の知らぬ刺客がいると言っののかの？」

俺は危機感を込める。

「清水がやられたのにも関わらずDクラスの連中、まるで動揺していなかったんだ…この引っ掛かる何かが、来ている。」

その時ムツツリーニから通信があった。

「どうしたのじゃ？」

『……松下。横溝が塚本を撃破した！』

「塚本は確かムエタイとボクシングを組み合わせた拳法持ちだったな…よく倒した。」

『……だが新校舎側にいる一部の突撃部隊が襲われ、回収が遅れている。中堅部隊及び啓吾は援護を！』

「秀吉、皆を。俺が先行する！」

「了解じゃー！」

嫌な予感がする…死ぬな明久！

- - - - -

視点：明久

『……残存戦力は24VS15！押しきれ明久！』

僕も島田さんも、持ち点尽き、作戦尽き、体力尽き…もう持たない。

<総合科目>

吉井明久：514点

島田美波：767点

ひっきりなしに続く連戦、乱戦。

雄二はもうすぐ戦争は終わると言ったけど、これは酷い。

「吉井…これ本当にやばいわ！」

「それよりも船越先生の方が恐いんだけど！いやあああ！（；；）」

船越先生の息が荒い…結婚の為なら単位を楯に脅す残虐非道、邪知  
暴虐な教師だ！

僕は雄二に売られた：絶対ころす！

と思うのも束の間、Dクラスの教室から御下げのツインテと金と茶の混ざった髪の子が出て来た！

「アキちゃん！ハアハア！」

「わてが相手や！いてこましたるっ」

<総合科目>

玉野美紀：1567点

仲沢好美：1472点

後ろから啓ちゃんが走ってきた！

「加勢に来たぞ明久ー！試験召喚っ！」

「島田よ！よく耐えたの！下がるのじゃ！」

「秀吉！多分Dクラスの近衛部隊だ！」

<総合科目>

松下啓吾：1006点

木下秀吉：674点

何時もなら2000点ある啓ちゃんもボロボロだ…。

「手出し無用！わてが仕留めるから、あの二人を追っんや！」

「「「「「了解！」「」「」「」



Dクラスの生徒が10人走ってくる！

「逃げるな！」

「吉井と島田を援護するんだ！」

生き残っていた仲間たちが壁を組んで行進する！

「統制をとる暇はない！近衛部隊と中堅部隊、予備戦力は全員突っ込めー！」

この声は雄二か！

背後から雄二が渡り廊下を走り抜けてきた！

ここで会ったが百年目え！

「雄二！しねえええええ！」

僕は鉛筆を投げる！

「横溝バリアあああ！」

カカカカカッ

やるな雄二、だが負けな！

（ゴキッ）

左腕の感覚が無くなった。

「ナイス島田。」

「松下と秀吉が交戦してるわ。相手は玉野さんと例の転校生よ！」

僕がうずくまっていると、ムツツリー二と須川君も合流する。

「……Dクラス代表は平賀源二と断定。近衛部隊は玉野と仲沢だけ。」

雄二は時計を見てにやけた。

「そうか……他クラスの生徒の下校の時間だ。時間は稼いだ、人混みに混ざり全員逃げろ！」

島田さんが、

「木下と松下は!?!」

「あいつらはそうは負けない。」

「……残ったのは俺と須川だけ。Dクラスの歩兵は後3人。」

「8人残ったか。向こうは6人。」

他のクラスの生徒たちがぞろぞろと歩く……帰宅するべく。

「待って!逃げないでアキちゃん!」

「まだ勝負は着いてないで！」

啓ちゃんは秀吉を引つ張って逃げ出してきた！

でも相手の二人は凄い！人から人へつたっている。

「清水といい二人といい滅茶苦茶だ！」

駄目だ、追い付かれる！

…なら攪乱すればいい！

「明久！？バカ！自分の位置を見せびらかすな！」

僕は啓ちゃんに、

「大丈夫さ！喰らえええー！！！」

僕は消火器を二本持ち…噴射あ！

プシューウウツッ！

大混乱となる廊下。

「アキちゃ、見えな、何処！？」

「見失ってしもうた！」

…どうやら二人を撒いたみたいだ。

「勝手に消火器を使用したバカは誰だ！」

鉄人の怒声が聞こえる。

知るか！

逃げるためなら仕方無いんだよ！

僕たちは慌ててFクラスへ飛び込んだ。

- - - - -

視点：啓吾

Fクラス教室。

鉄人の怒声が鳴り響く中、

「それで、Dクラスの女子のコンビはどうだった？」

雄二が俺に聞いてきた。

「かなりのもんだ…二人とも清水並に強かった。《武器職人》と《完全演技》でさえ点数は削りきれなかった。」

「大問題だな…明久は。」

「あいつは《観察処分》者だ。実力を公には出来ないと言ったのはお前だぞ。」

須川が姫路を連れてきた。

「雄二！ 姫路の回復試験が終わった！」

「はあはあ… 終わらせました！」

そこへ、この戦争の切り札であり、現在全科目のテストを受け直した姫路が到着。

最後に受けたテストは振り分け試験の為、途中退席した彼女は全科目0点だった… しかし彼女は無事に全ての科目を受け直す事が出来た。

「吉井君、大丈夫でした？」

「あいつなら大丈夫。生きてるよ。」

「本当ですか？ 良かった…。」

俺は姫路にガッツポーズをする。

「あいつとは幼稚園の頃からの付き合いだ… 精神力は間違いなく学園全一だ。」

『ピンポンパンポン 船越先生、船越先生。至急2年Fクラスに来てください。吉井明久君が教師と生徒の垣根を越えた、』

明久が泡を吹いた。

「信じがたい？」

「あつ、あははっ……」

「秀吉：声真似をするのはいいが、死者が出るなら止める。」

「済まぬのう。一度からかってみただけなのじゃ」

<補足>

船越教諭

45歳独身

婚期を逃し、ついには単位を盾に生徒に交際を迫る様になった女性教師。

「つくづく思うが、明久は可哀想だ。よりもよって船越女史の生贄に捧げるとは、雄二も中々やるな。」

「あつ、あの……。」

「明久、生まれの不幸を呪うがいい。」

「吉井君：本当に大変なんですね。」

身心ともに虚無と化した明久の姿に俺と姫路は苦笑いするしかなかった。

ガラッ

俺は立ち上がる。

雄二は不敵に笑う。

「代表自ら出陣か。」

雄二はにやにやしてDクラス代表を見る。

「散々コケにされたからね…坂本！俺が直々に手を下してやる！」

後ろには玉野と仲沢がいる…さらにDクラスの生徒が3人か。

「ま、済まなかったな…こつなつたらとことんやるっぜ、《皇王》さんよお！」

「舐めるな！地獄帰りの《悪鬼羅刹》程度にバカにされてたまるものか！！！」

FクラスVS Dクラス。

最後の激戦が始まる。

**第6話 迫り来るDクラスの強者たち！（後書き）**

初バトル：いかがでしたか？

更新のペースが不定期で済みません。

えー次回は登場人物を紹介します。

PV5000突破しました。

読者の皆様に感謝！



### 登場人物紹介3 (前書き)

三回目ですな。

前回紹介しなかったFクラスのメンバーに関して説明します。

### 登場人物紹介3

横溝 浩二（変更点のみ）

・《地獄の番人》と恐れられている。二年生の中でも屈指の持久力を有している。機動性は一般人クラスだが、フルマラソンをしても息切れ一つしないと言われている！

・ F F F 団副委員長。 F F F 団についてはここで一気に説明する。

< F F F 団：階級一覧 >

・ F F F ランク

戦闘力は軒並み高く、かつ能力が異常に高い者のみが在籍する。

メンバー：須川亮、ムッツリーニ

・ F F ランク

かつては非常に優れた実力を持っていたが、諸事情で鈍りに鈍った者が在籍する。

メンバー：吉井明久、坂本雄二

・ F F ランク - 非戦闘員

戦闘は不得手だがある分野で優秀な技量に富んだ偏屈者が揃っている。メンバー：松下啓吾、横溝浩二、木下秀吉

・ F ランク

メンバー：上記記載された七人を除く。

(備考)

- ・ F F F 団の参加資格は特に定められていない。
- ・ 3年前に須川と横溝が立ち上げた『リア充撲滅委員会』が元になっている。
- ・ 他クラスにもメンバーがいるが、詳しい情報は無い…資料の収集を求ム。
- ・ 下克上は盛ん。特に F F F と F F は入れ替わりが激しい。

島田 美波(変更点のみ)

- ・ 天性の怪力の持ち主で、総重量 150kg の衣類を身に付けられても何不自由なく生活することが出来る。
- ・ 日本に来てから護身術として、自衛隊格闘術(自衛官の白兵戦・徒手格闘戦の戦技として編み出された格闘術である。)の一つ、徒手格闘を学ぶ。
- ・ 柔道と相撲の投げ技で牽制し、合気道の関節技とプロレス技で畳み掛ける戦法をとる…近接格闘戦に持ち込まれぬよう心掛ければ勝てるだろう。

姫路 瑞希（変更点のみ）

- ・文月学園3年Aクラスに兄が在籍。
- ・それ以外に情報が存在しない…。

**第7話 勝者と敗者と新たなステージ（前書き）**

今回はバカテストはありません。

## 第7話 勝者と敗者と新たなステージ

視点：明久

「玉野さん…僕が君の相手だ！」

僕の眼に映る玉野さん。

「アキちゃんと剣よりも身体を交えたいんだけど…十分ね！」

「意味が分からないから…勝つ！」

玉野さんは僕の頬を触る。

「ふん。アキちゃんは私に勝つつもりなんだあ」

「な、なにさ。」

玉野さんが召喚獣を出す。

「玉野美紀…《皇女》が御相手します！標的はアキちゃん…私色に染め上げる！」

「屈しはしない！負けるもんかあ…！！！！！！」

玉野さんの召喚獣は…弓とソードかつ！

「先手必勝オ！僕に挑む相手は皆叩き潰す！」

距離の取り合い…先に仕掛けたのは玉野さんだ！

「アキちゃん…木刀だけ？真っ直ぐでいいねえ。」

点差はほぼ直角…啓ちゃんと秀吉が削ってくれたんだ！

「ふ…僕を見くびらないでよ！」

矢が飛んでくる…どれもこれも直撃コースだ。

頭の中でアーケードのコントローラーを思い浮かべ、操作して交わすんだ。

「交わすだけなんてつまんないー！」

何とでも言ってる！

待つんだ…彼女が剣撃に走るのを！

それまでに玉野さんの癖を探す。

「拡散ッ！」

チエツ！三本の矢を同時に打てるのかよ！

精度が欠かれているから打たれてから避けるしかない。

付け入る隙は…矢を構える時くらい。

だがその間は召喚獣の姿勢を正すのがいっぱいいっぱいだ！

長期戦に持ち込まれたら不利だ！

よくやる…が、しかし。

「乱れ撃つ！」

玉野さんが声を荒げ、十数本の矢を飛ばした！？

動いちやダメだ…こつちに来る矢だけはたき落とす！

「直撃コースは3本！ガアアアドオ！」

僕は木刀をロツドの如く振り回し、弾き落とすのも束の間、玉野さんがソードを持って突っ込んでくる！

「隙が出来たねアキちゃん！覚悟お」

「望み通りに…なるかよ！」

ゴンッ！

「い、だあ…っ」

「頭突き！？」

僕の召喚獣は玉野さんの召喚獣に頭突きを喰らわせた。

フィードバックのせいで、頭が痛む。



「いい加減に…諦めて貰えると助かったんだけど…アキちゃんは強いねえ！」

「はあ、はあ…勝つんだ。こんなことで終わらせるかよー！」  
強気に返すけど、

（頭がボーンとする…3分持つかな？）

「攻め継ぎ！」

「回避！」

シュバツ

理論的に考えるな…当たり前を排除しろ！

木刀を投げる！

「武器を手放した？自殺行為だな」

「ドオリアアアアアアーンツ！！」

「な、なにをするの？」

飛び上がってからクルリと、右拳を下に向け、重力、筋力、そして全体重をかける！

「中学時代、武器を投げて注意を反らし、拳で殲滅…名付けて『トリック&パンチ』いいいい！！！！」

「ネーミングセンス悪っ！って、わっ！」

玉野さんは右足を軸にして回転し、かわすが…体勢が崩れた！

チャンス！

「僕も攻め継続は得意なんだ！」

右拳を地面に突き刺し、

ギョルルルッ！

落ちた木刀を左手で掴み、そのまま廻す！

「地龍式足払い！」

「所詮は地を這いつくばるだけの存在！飛び上がれば…！」

「飛び上がるよねー読み通りだああ！」

体勢を立て直し、僕は木刀を左手で握り、右手を剣先に添える。

「牙突もどきいいい！」

「滅茶苦茶な技を連発しても、私には届きはしない！剣よ弓よ槍となれ！」

玉野さんがソードを数本の矢ごと握り、迎撃に出た！

ギイイイイ!

木刀とソードが真つ向からぶつかった!

「!?!?!」

剣同士がぶつかった衝撃で、火花が飛び散り…僕の木刀が燃え上がりだす。

ポオウツ!

「木刀が火に…燃えちゃうね」

玉野さんは勝利への栄光に酔いしれ、身体をブルブルさせ…恐怖した。

「!?!?な、何それ…木刀が炎を纏う?」

フィードバックで身体中が熱い…焦げるような痛みだ。

「ぐ、偶然だけど…ね!」

「ハツタリを!諸刃の剣に何ができる!」

玉野さんは鬼の形相で睨み付ける。

「試験召喚戦争…科学とオカルトの交差…ふざけるな!召喚獣が意志を持つなあああ!?!?!」

お互いの点数は…一桁。

「大人しく逝け！私はアキちゃんを玩具色に染め上げるんだ！何で死なないのー アキちゃんは死んでなきやいけないじゃないかああー！ー！ー！ー！」

ギリリツと弓を引き絞り、止めに来たか！

「頼む…《皇女》をその一片を残らず燃やし尽くしてくれ！」

僕の召喚獣は応えるように…身体中が炎を纏った。

その姿は、

「い…イフリート…。」

木刀に宿る業火。

かつての戦場を想起させる…恐怖。

僕は、狂った。

「カカカ…クフフ…ハハハ…！謳え！ヘルファイアの名も無き炎人よおおお！ー！ー！」

ブウンツ！

一撃で召喚フィールド内が火の海となる。

「《金色の疾風》…お前は一体何だ、何なんだお前はー！ーツ！」

ギシャアッ

「火龍一閃。」

「も、燃える…燃えて朽ちる…い、いや、あああ……………」

玉野さんの召喚獣が燃え上がる炎の中に消え去り…玉野さんはその場に倒れ込んだ。

その直後…僕も気絶した。

(吉井明久…ってなんなんだろうね…。)

……………

視点：美波

ズバツ！シユン！ギギギ…。

ウチは闘っている。

「あんだ、思ったよりも強いじゃない！」

「まだや…この程度で、ワテの命はやれへんね。」

何度打ち合ったか分からない…決定打となる攻撃は一切ない。

転校生なのにウチよりもパワフルに動いてくれるわね…。

力だけは自信があるわ。

ドイツにいた頃は150kgの鎧を装着しても大丈夫だったし、日本に来て自衛隊格闘術も学んだもの。

身体能力では勝っている筈なのに…最大限に生かすように努力している筈なのに…あの子、本当に凄い。

身体能力に圧倒的隔たりがあれば点差に関係無く、容易く勝利を掴みとれる。

でも…。

「強いやろ、わては。」

「恐ろしいくらいにね。大阪から来たんですってね。ウチもドイツから来たの…負けないわ!」

「おもしろいなあ、あんさんは!」

「ホント、試験召喚戦争があつて良かったわ!」

召喚獣の操作に関してはど素人…大したもんね…だけど!

「だあああつ!」

「ぐ…！」

ドゥッ！

仲沢さんの召喚獣が武器を手放して倒れる。

「よく頑張ったわね。もうバテバテじゃない…それ以上動くと体に障るけど？」

「縁起でも無いなあ。ポツクリ逝く程わては脆くはないねんで！」

ぎこちなく立たせる仲沢さん。

「残念ね…出来れば転校早々、死なせたくはなかったんだけど。ま、それがアンタの意地なのね。」

「バカにされて悔しいわぁ…しゃーない、今回は負けたる…わけないやろー！」

仲沢さんは突撃させる。

「浪速魂やー！」

「意気込みはいいけど…顔洗って出直しなさい！」

斬ッ！

仲沢さんの召喚獣は首を落とされながらも、剣をウチの召喚獣の脇腹に差し込んだ。

「危ない危ない。紙一重の差ね。」

「厚すぎる一枚やな。島田はん。名前は覚えとく…だが心に一つ留めてくんはなれ！わてに宿る《西の天才肌》の義は、不屈にして無限っちゅう話や！」

戦死した仲沢さんはピースし、そして、

「暇あつたらまた付き合つてな…よろしゅうに！」

「ええ、また遊んであげるわ。」

ウチは西村先生が彼女を補習室に連れていくのを見えなくなるまで手を降り続けた。

(…危なかったわ。次に会うときまでにウチも頑張らなきゃ！)

ウチは一桁の召喚獣を見て眩いた。

.....

視点：雄二

ある奴は『光』を持つ。



切札として、主人公として活躍出来る。

実力も、運も、名声もある。

だが俺は『光』を持たざる屑である。

狡賢く生き、小細工を使い、自らに危険が及ばぬよう逃避行を続ける小悪党に成り下がった。

……。

……。

……。

憧れていた『主人公』に否定され、貶められ、軽蔑され。

『主人公の取り巻き』のように大衆主義に浸り、勧善懲悪に包まれて気楽に生きることが出来ない。

『世間一般』に駄目だと、クズだと、奇人だと決めつけられる。

ついには『家族』にも見棄てられ……。

果てに『自分』をキエル、シヌ、ウセル、メザワリ、イナイ、……と認識して、認識しなくなる。

何度諦めれば助かると思ったか。

創作話の登場人物のように役割だけを演じ、ハッピーエンドを導き出す。

……。

……。

……。

違つたらーが！

俺は俺だ！

他者に教わり、他者に植え付けられ、他者にレッテルを貼られ、よくいる奴になるのが嫌だったんだ！

だから卑怯になろうが、冷酷になろうが、自分で自分を自分流に認識する！

『何か』にならなくとも『自分』になりさえすれば、想つように、願うように、目指すように生きる…諦めも絶望も無い！

人生を気儘に、自由に、我が儘に！

縛らずに、抑えずに…いけたなら。

過程も結果がどうであれ満足に納得出来るようになるんじゃないかな？

辿り着いた場所がゴールって事で。

お前は俺に成らないよう、俺はお前に成らないようにな。

じゃあな…楽しかったぜ。

次に会うときには『同じ』にならないことを望む。

《悪鬼羅刹》への、《絶対悪》からの『最後の手紙』から一部抜  
粋。

闘いの過去、波瀾万丈な人生、生きるか死ぬかの瀬戸際を。

今も尚、戦い続ける俺を。

明るい道を捨て、暗い夜道をかけ上がっていった頃を。

……。

混沌の中にはただ二人！

《平賀現二》、《坂本雄二》。

響かせる。

「てめえ、死にやがれええ！」

「お前は死ぬべき存在だっ！」

掛け声を上げ、突撃をかけるは、《悪鬼羅刹》 ウウウ……！！

「正拳勝負といくぜ！」

「皇王、後ずさるべからず。」

俺は玉碎覚悟の特攻を決意する。

平賀とのタイムマン……3年前のように、2年前のように噛み付け！

《悪鬼羅刹》は誰にも飼えぬ！

「おおおーっ……！」

平賀は居合い斬りの構えをとり、

「《首斬地蔵》！」

「チィィィ！」

俺は召喚獣を正座し、上半身を後ろに曲げさせる。

古くから柳生街道の目印となる、滝坂の道沿いに点在する石仏の1つ。

お地藏様の首にある刀を入れたような跡は柳生十兵衛の弟子、荒木又右衛門が試し切りをしたという伝説がある。

江戸初期の話になるが、

荒木又右衛門は、槍を持って馬上にいた者の足を薙ぎ、返す刀で斬って即死させた。

時速50km以上で走る馬の攻撃に反応し、さらに槍を得意とする者に、リーチの差をもとせず、刀の勝負で容易く殺害したのだ…神業と言えよう。

さらにその斬り合いの最中、余裕綽々で「おう、仇敵でござる」とか返事したそうだ…度胸には驚かされる。

かつ、逆上した者からの背後からの攻撃を、腰にあつた鞘で受け、さらに斬りかかられるころを振り向いて刀で受け、刀身を折られながらも劣刀を用い仕留めきつた。

愛刀は山城の名流『来家』を再興した『来金道』こと『和泉守金道』ではあるが…日本刀ではなく西洋の大剣でかの偉人を表現する平賀源二は間違いなく異常だ。

実際ヤツの横薙ぎからの回転斬りは見てからでは到底避けきれぬものではない。

知っているから回避した。

何度も苦勞させられた剣技。

「その程度か坂本？俺は無傷だが。」

汗が垂れる。

「驚いただけだ。ちっとも鈍っていないんだな…安心したぜ。」

平賀の召喚獣が俺の召喚獣から離れる。

「余裕綽々か。」

「そうだ。かつての荒木又右衛門のようになあ。」

と、薄ら笑う。

「模倣したのは俺だ。御前ではない。」

ジャキッ

大剣《修羅》が、俺の召喚獣の足元を狙いつける。

「やけにリーチが長い得物だな。だが外せば隙が出来るぜ…王様さんよ。」

当たる直前にボクサーの如くバックステップで下がる。

「ボクサーの基本動作は全て予習済みだ…反応には自信がある。」

「ならこの手はどうだ。」

平賀の召喚獣が修羅王に刺激を与えると、

ただの剣に過ぎなかった修羅王の表面が砕け落ち、槍と化した。

現実世界に換算すれば4 m超…先端と末端の双方に刃が見える。

俺は召喚獣にナツクルをはめ直し、向かわせた。

「薙刀とは驚いた。」

「そつだ。俺の召喚獣は高火力の大剣と高機動の両刃槍の二種を使いこなす。反してお前は近接戦闘に特化したナツクルのみ。近付く事も出来ずに、死ね！」

ナツクルで受け止めれば数発は切り飛ばされねえ筈…そつから近接戦闘に持ち込む。

ナツクルダスターは、拳にはめて打撃力を強化する武器だ。

コンパクトなものでも打撃力を大きく高める隠し武器としての効果がある。

一見すれば指輪にしか見えず、闇討ちには最適だ。

対して大きなサイズのもは、スピードが遅くなり隠匿性が低下するもの、打撃力は絶大だ。

刃や棘があれば、硬い目標物の破砕もやってのける。

防御する側としては、素拳以上に厄介で、受け技などで防御した腕や手の方にダメージを与えられる。

バット、竹刀などで叩き落とそうにも、的が小さく当てづらい。

相手によれば、ナイフやサーベル以上の脅威となりうる。

ちなみに俺の召喚獣の武装は漆黒の棘つきナックルだ。

利点は多いが…近接戦闘が可能になるまで近付かないといけない。

平賀の両刃槍を回避出来なければ攻撃に移れない。

間合いに入り込めなければ、ダメージ負けし、敗北する。

明久達は自分のことで精一杯だろうから…助けは来ないか。

……。

「来い！圧倒してやる！」

槍を回転しながら向かってきた！

「そのリーチの差がめえの首を締め上げる。極端に近付けば対抗手段は無い！」

「貴様の反応が間に合う事はない！」

平賀は敢えて俺へ突っ込んだ！

意表をつかれる！

「《皇王》に後退など無い！」

槍がかすった。



「それでこそ『平賀源二』だぜ！こうなったら一か八かの大勝負に出る！」

もう勝利の秘訣など無い。

切札の切り方も、勝負に出るタイミングも、時の運も、意味を為さない。

己の実力だけが真実だった。

俺は雄叫びを上げ、接近に成功した。

「ド派手に決める！」

平賀の槍の刃にナックルを直接当て、しがみつくように全身で押さえる。

「ゼロ距離なら槍を突いても威力はゼロだな！平賀アアア！」

「振り落としてやる！」

既に点数は、互いに一桁になりつつある。

平賀は、巨大武器を持たせれば、手も足も出せない、無敵の防御を演出する。

「し、しっひいー！」

だが槍の動きに合わせれば、遊園地のアトラクションに過ぎない。

やがて俺の召喚獣は槍から飛び上がり、平賀の召喚獣の真上へ飛ぶ。

「飛ぶ鳥を撃ち落とす俺に空中戦とは迂闊な奴！」

当然平賀は槍を上突き立てんとするが、

ガッ！

「ぶ、武器が長すぎて垂直に槍が向けられない！？」

平賀は飛び上がらずに槍をそのまま突き当てた。

だが長すぎる槍：身長よりも長い武器故に召喚フィールド：つまり地面に刺さり、素早く動かせなかったのだ。

「隙が出来たな。」

「グ…慣性で想つように操れない！」

俺が得意とする『間合い』。

一気に強力な拳を打ち出す。

リラックスした柔体から、力む事なくスムーズに拳を段階的に加速し、手首のスナップを最大限に生かして放つ打撃！

「二重の極み…知ってるよな。」

実用的な技とは言えないが。

「!？」

いかなる武器、障害物を粉碎する技法。

万物には固有振動というものが有る。

固有振動数にあわせて振動が与えられた状態を共振、共鳴という。

共振をすると振動が積み重なっていき、その力が大きくなりすぎると物質が崩壊するのだ！

実際、ワイングラスが高い声（速い振動）で割れる、風で橋が崩壊した記録が残っている。

この技は人の力だけでやってのける…習得は至難と言われている。

物質には強度、硬度が存在するため、その衝撃が完全に伝わらない。

だが刹那の瞬間に二度の衝撃を打ち込む。

すると第一撃目は通常通り物体の抵抗で緩和されるが、刹那の瞬間に打ち込まれた第二撃目の衝撃は、抵抗を一切受けることなく完全に伝わるため、物質の硬度に関わらず粉々に粉碎することができるのだ!!!

ゴッ…ガッ…バギヤアッ!!!

いかに強力な武器でも、粉々に砕け散れば無となる。

「まだまだアーツ！」

平賀の召喚獣が俺の召喚獣の両手を掴んできた！

「これならナツクルは使えない！肉弾戦で…！」

「肉弾戦は苦手じゃねーの…か？」

短い気合いと共に追撃の膝蹴を、才蔵の召喚獣の顔面に叩く、叩く、叩く…！！

この徹底的に無慈悲で、執拗なまでの攻撃こそが、《悪鬼羅刹》だ！

「どうせやるなら、徹底的にな。お前が俺の弱点を知っているのなら、尚更だ。修羅さえ凌駕し、俺は『俺』で居続ける。」

それがかつての俺、そして今の俺だ。

「《皇王》が…敗北に墮つるのかっ！」

「そつだ。てめえの負けだ。敗因を教えてやるよ。」

「な…に…？」

俺は膝蹴で浮き上がった才蔵の召喚獣の頭部に踵落としを喰らわせ、消し去った。

「プライドに束縛され、妄信的に猛進するから首を絞めた。世間知らずもいいとこだぜ…《皇王》が選ばれた人間と勘違いするお前の姿はお笑いだっただぜ。」

俺は平賀の肩を叩き、Fクラスから出ていった。

「この勝負…Fクラスの勝利！」

鉄人の宣言を背景に、《悪鬼羅刹》は次なる目標へ走り出した。

## 第7話 勝者と敗者と新たなステージ（後書き）

ごり押しになったものの、Dクラス戦を描ききれました。

知らないうちにPV7000を突破！

ありがとうございました！

次回は戦後対談、そして……！！！！

## 第8話 さらばDクラス！強者達との別れ（前書き）

問 『やんごとない』の意味を書き記しなさい。

吉井明久以外の二年生の答え  
『貴い』

・教師のコメント  
正解です。

吉井明久の答え  
『ヤバくない』

・西村先生のコメント  
お前の頭がヤバいんだ！…流石は『観察処分者』の面目躍如といっ  
たところか；

## 第8話 さらばDクラス！強者達との別れ

視点：啓吾

「という訳で、D組代表は死んだ。」

『……勝った。』

無線越しから伝えられるムツツリー二の報告に、俺達は安堵した。

だが、被害は大きく、玉野、仲沢、清水、塚本、そして平賀の5人に極限に追い詰められたのだ…危なかった。

「雄二…凄いな。」

「いや、大したことはない。平賀があそこまでやるとは思わなかった。」

文字通りの『激戦』だった。

姫路抜きに勝ったからいいものの。

すると明久が1点だけ稼いで戻ってきた。

「雄二…船越先生の誤解を解いたよ。」

近くの御兄さんを犠牲にしたとのこと。

須川、島田、ムツツリー二、秀吉も無事に帰還した。



「D組に行くぞ。戦後処理だ…姫路も来い。」

卓袱台で作られたバリから姫路が、

「は、はい！」

ひよっこり出てきた。

俺もDクラスへと足を運んだのだった。

-----

Dクラス。

全員戦死したらしく、教室に居たのは平賀だけだった。

こちらも42人死んだ…が、1対8での対談は平賀としては嫌だろ  
う。

雄二に倒された平賀も、戦後処理が終わり次第、回復試験の義務を  
負うことになる。

「坂本…見事な腕だった。完全なる敗北だ。で、教室の明け渡しは、  
いつにする？」

切り出す平賀。

「その必要はねえ。」

雄二は、平賀にそう返した。

「…要求を飲め。そういうことか。」

「ああ。お前のクラスには5人の強者がいる。しばらくの間借りたいのさ。」

「パシリ…か。」

「まあな。俺は…ここでは止まらない。次に目指すのは《絶対悪》率いるBクラスだっ…!!」

「…さ、坂本!?!?!」

俺も叫ぶ…てつきりAクラスに仕掛けると思っていたからだ。

Dクラスでこれだけ苦戦したのに、より格上のBクラスに仕掛けると言うのだ…!

平賀は驚く。

「あ、あの男に挑むと言うのか!?! 《絶対悪》に…!」

「無謀と罵るなら好きにしろ。俺は奴を打倒する。」

「あいつは狂気そのものだ…!」

雄二は頷く。

「だろうな。アレはまともではない。」

「坂本…お前は…何をするんだ？」

「説明の手間は、省く。クラス設備降格と引き換えにお前らを差し出す…交渉をしたいが、どうする。」

「俺と美紀、仲沢さんと塚本は問題ない…それで済むなら儲けモノだ。」

「清水は？」

雄二の質問。

「清水は美紀の親友だ。彼女に任せるつもりだが…多分大丈夫だと思っ。」

「わかった。」

島田が前に出てきた。

「平賀。美春にはウチからも伝えておくわ…そうね、今流行りの、駅前の喫茶店『ラ・ペデイス』は、美春の実家だし、食事するついでにね。」

平賀の表情が緩やかになる。

「仲沢さんも呼んでいいかい？君と話がしたいんだと。」

「いいわよ。ウチは大歓迎よ。」

雄二は、その発言に、友好関係を深めるのは悪くないという態度で話を続ける。

「合意って事でよろしく。」

「ああ。だが、坂本…《絶対悪》には気を付けろよ。」

「ああ…奴ほど卑怯かつ錯綜した作戦を考えうる『常人』はいないからな。」

すると平賀は暗い表情を見せる。

「《絶対悪》だけじゃないぞ。」

「なに？」

流石の雄二も難解そうに頭をかく。

意味が分からないという顔をする雄二に、

「実は俺達もBクラスに勝利すべく、調査をしていたんだが…相当の実力者の存在を突き止めた。」

平賀は雄二に一枚の紙を突き付けた。

「じ、こいつは…!？」

雄二の顔が驚愕に歪む。

俺も明久も、ムツツリー二も秀吉も驚きを隠さざるを得なかった！

その名前を知らない者は居ない。

「ま、まさか：去年の二年生でただ一人、『留年』しちまったアイツが、Bクラスに在籍してるとっていつのか!？」

平賀は頷き、

「ああ。一昨日、学園長室を横切ったときに聞いたんだ。」

- - - - -

視点：カヲル

一昨日、午前8時

文月学園長であるあたしは、一人の女子生徒と談話していた。

「まさか：文月学園初の『原級留置者』がアンタとはね。」

「は、はは……。」「

175cm超えの美女は苦笑いをする。

蒼色の瞳と長髪…女性とは思えぬ筋肉のつきよう。

「で、でも！わたしが悪いんじゃないんだ。高速道路でバイクを運転してたらスリップしてきたダンプカーと正面からぶつかって、撥ね飛ばされて住宅地に頭から突っ込んで…大怪我して、最近まで病院暮らしを強いられたんだ！」

「確か、《去年の九月初旬から十二月中旬まで》入院して、それで出席日数が足りなくて留年…だったかね？」

大きく頷く美女。

「まあ死ななかつただけマシさね。」

「も、もっと心配しなよー！」

あたしは溜め息をつく。

「学園のルール…『総出席日数が2/3に満たない者は成績、功績に関わらず原級留置とする』…きっちり守ってもらおうよ。」

「残酷過ぎる…。」

「ま、アンタの家族も『ああいう』タイプだし、1年くらいは苦勞してもいいと納得したんだ。退学よりはマシさ。」

「うん…。」

「まあBクラスに入れる成績だから留年することもないだろう？あ  
たしも応援するから、頑張りな。」

「はい、学園長……。」

その女子生徒：『滝川 水瀬』は、Bと書かれた紙を持って、部  
屋を出ていった。

- - - - -

視点：啓吾

「その情報はモノホンか？」

無理もない。

信じ難い情報だ。

学力至上主義の権化の文月学園。

テストの点数さえあればいい考えだ。

だから文月学園の生徒は、

1：成績・功績は高い上に性格・存在・行動も理想的である。

2：成績・功績は高いが、性格・存在・行動に欠陥がある。

3：成績・功績はそこそこ安定していて、性格・存在・行動に突出した部分は無い。

4：成績・功績は低いが、性格・存在・行動においては評価に値する部分がある。

5：成績・功績は低く、性格・存在・行動にも問題がある。

と、五つに区分される。

姫路と霧島は1に、横溝は4に入ると言えば理解できるだろう

しかし…この5つの区分以外にもう1つ階級が存在する。

6：ある分野に関した時、異常なまでの実力を発揮できる

タイプだ。

《完全演技》もとい『木下秀吉』がいい例だ。

一度見ただけで完璧に真似をし、『音楽・美術』の試験に限り40  
0点以上稼ぐ。

当然だが、明久も雄二も俺もムッツリーニも、6つ目に入る。

そして…《絶対悪》も《あの女》も。

……。



平賀は雄二に警告する。

「《絶対悪》は戦闘は不得手だが、《あの人》は、ガチだ。」

「知ってる。《金色の疾風》を秒殺した話は有名だ。」

明久はガタガタ震えていた。

「……俺は殺されはしなかったが、隙は無かった。盗撮出来ていない数少ない女だ」

ムツツリーニも実力を認める発言をする。

ここで俺は平賀に言う。

「《絶対悪》…《あの人》を利用出来るのか？」

平賀は首を横に振る。

「もう一つ噂がある…《あの人》が入院していた頃、その病院に《絶対悪》が幾度と出入りしていたのを美紀が見ている。親しい可能性がある。」

雄二は少しばかり考えてから、

「Bクラスについて調査しろ、ムツツリーニ。二人以外に厄介な奴が潜んでいるかも、だ。」

「……了解。」

消えた。

「気を引き締める必要があるな。情報提供、感謝する。」

「礼には及ばない。」

「しかし…まさか姫路さんがFクラスだなんて信じられん。」

平賀は姫路を見て驚く。

「す、すみません。」

謝ろつとする姫路の肩に俺は手を置いた。

「謝る必要は無い。」

「松下君の言う通りだ。姫路さん…俺はFクラスを甘く見ていた。」

明久も平賀に話し掛ける。

「平賀君、いい勝負だったよ。ね、秀吉」

「うむ。皆満足に闘えたのじゃ、不満を持つとる人はおらぬよ。」

「うん…でもなんで雄二はAクラスに攻め込まないんだろ。」

雄二が横入りしてきた。

「少しは自分で考える。そんなんだから、お前は近所の中学生に」

馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

「なっ！そんな半端にリアルな嘘つかないでよ！」

「スマンスマン。近所の小学生だったか」

「……人違いです」

「明久、お前言われた事が……？」

まさか。

俺と雄二は明久を憐れみの目で見た。

「兎に角、Dクラスの設備には一切手を出さない。かわりに、俺の指示に従ってもらおうように交渉したんだ。分かったかバカ久。」

雄二は平賀に目を向け、

「指示については後日詳しく話す。今日はもう疲れただろう。今日はこの辺で御開きとしよう。」

「ああ。有り難う。お前らがBクラスに勝てるよう願う。」

「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思っっているだろ？」

「無理ではないさ。FクラスにはBクラスに対抗しうる手立てがあるじゃないか。…さてと、俺も補習室に行くよ。次は勝たせてもらっよ、雄二。」

じゃあな、と手を挙げてDクラス代表平賀源二は去っていった。

…さらばDクラス。

必ず勝つ。

俺達は第一歩に出ただけなのだから。

**第8話 さらばDクラス！強者達との別れ（後書き）**

少し風邪気味です。

でも更新頑張りますよ！

次回からBクラス戦に入ります。

## EX1 化学兵器『ミスキ』！逃げる作者

視点：アルたん

「姫路瑞希の楽しい料理教室うー！ー！」

俺は何故ここにいるんだろう。

半ばごり押しで、気味が悪いほどの、明るい雰囲気が始まったこの企画だが…。

『化学実験室1』…どうということなの？

「ええっと…このコーナーは、吉井君や坂本君に美味しい料理を召し上がって貰えるよう、練習する為に私が考案しました！今日のゲストははるばる近畿から文月学園にお越しくださいました、『アルたん』さんです！」

パチパチパチパチ！

信頼と安心の一人握手。

そんな企画で大丈夫か？

「大丈夫です、問題ありません さて、今日は肉じゃがを作りたいと思ってるので、アルさん、実況を御願います！」

「ああ、頑張つて！」

## 材料

「まずは肉じゃがの材料の紹介をしますが、在り来たりな既存物は万人受けしないので、変わった肉じゃがにしますね。」

「おお！wkwkしてきましたよ！」

「腕によりをかけますから、期待して下さいね！」

うん…その前に家庭科室に行こうよ。

5分後

「それでは材料の紹介です。」

「やりましょう、やりましょう！」

「材料は、4人分です」

メイン

じゃがいも大4個

たまねぎ大1個

しらたき1玉  
牛肉（薄切り）200g  
グリーンピース大さじ3  
サラダ油大さじ3

煮汁

砂糖大さじ3  
みりん大さじ2  
しょうゆ大さじ4  
水カップ2

おまけ

秘密のレシピ

凄く……豪華です……。

作り方

「じゃがいもは皮をむいて、適当な大きさにきります。10〜12個くらいに切り分けるのがいいでしょう。たまねぎは芯を落としてから厚みを3等分して同じ大きさのくし形に切り分けます。牛肉は3〜5cmくらいに切りましょう。好みに合わせて多少大きさが変化しても構いません。」

これだけの作業をスムーズにこなすとは…相当の上級者だ！



「しらたきはサツとゆでてアクをとりましょう」

「それは…流行りの『灰汁取りブラシ』…出来る!」

微笑ましい光景だ。

「鍋でサラダ油を熱し、たまねぎをいためます。少し透明になるまで炒めるのがコツです。」

大変だ…玉葱全体的に同じ色に炒めるのは難しい。

姫路さんはせつせと作業を続ける。

「たまねぎが透明になるまで炒めたら、そこに牛肉、水けを切ったしらたきとじゃがいもを加え、全体に油が回るように炒めましょう。」

ここまでミスは無い…何事もなく終わりそうぞで安心した。

「牛肉の色が変わったら分量の水を加え、最初は砂糖・清酒・みりん・しょうゆ各大さじ2で調味をしてください。すぐふたをし、火加減は煮立つまで強火、煮立つたら少し火を弱めてアクをすくい取りましょう!」

ここまでテンプレ。

「ではここで…秘密のレシピを使いましょうううう!!! 全体に煮汁の色が均一になったら、濃硫酸を45ccを加えましょう。」

「じゃがいもに含まれるデンプンを加水分解させ、単糖類を生成す

るんだな。」

硫酸 ( $\text{H}_2\text{SO}_4$ ) + デンプン ( $\text{C}_6\text{H}_{10}\text{C}_n\text{H}_{2n}\text{O}$ ) = 単糖  
類 ( $\text{C}_n\text{H}_{2n}\text{O}$ )

デンプンを希塩酸または希硫酸と加熱すると、加水分解が起こり、グルコースが得られる。

これ以上加水分解されることはない：グルコースのように、これ以上加水分解されない糖類を単糖類という。

単糖類は糖類全体を作り上げる基本単位として考えられる。

覚えておいて損はない。

「これで甘味は付加された。で、次のポイントは？」

「ちなみに薬品は必ずラベル側を持ちましょう。次ですが、仕上げとして、一煮立ちした所でいったん火を止めます。」

ほうほう。

「そして隠し味に、酸味を強調したいときはクロロ酢酸を加えましょう。さっぱりした酸味が食欲をそそりますよ。」

クロロ酢酸とは、酢酸に似た刺激臭を持つ潮解性の物質である。

腐食性が強く、劇物に指定されている。

除草剤の一種として知られる2,4-ジクロロフェノキシ酢酸の原料として利用されている。

クロロ酢酸は赤リン、硫黄もしくはヨウ素といった触媒の存在下で酢酸を塩素処理することで合成される。

また、硫酸を触媒にしてトリクロロエチレンを加水分解させる方法でも合成できる。

「酸味が増えたが、腐食性があるんじゃない、日持ちしないな。」

「対策済みです 最後に硝酸カリウムとグリーンピースを入れましょう。防腐剤として硝酸カリウムが働き、グリーンピースのおかげで彩りも豊かになります。」

### 化学式の纏め

食塩 (NaCl) + クロロ酢酸 (CH<sub>2</sub>ClCOOH) = クロロ酢酸ナトリウム (C<sub>2</sub>HClClON<sub>2</sub>) + 塩酸 (HCl)

硝酸カリウム (KNO<sub>3</sub>) + 硫酸 (H<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>) = 硝酸水素カリウム (KHSO<sub>4</sub>) + 硝酸 (HNO<sub>3</sub>)

塩酸と硝酸が残ったな。

…ん？

塩酸 + 硝酸 = 王水

玉水

王水とは、硫酸や塩酸よりもはるかに強力な溶解力をもつ液体で、金やプラチナをも溶かしてしまう。

旧ベルギー領コンゴは、1960年に独立を得たものの、1961年、初代首相パトリス・ルムンバは、軍人により打倒され、処刑された。

噂では、死刑執行人は、地上に何も残さないために、硝酸と塩酸の

混合物、「王水」で彼の死体を溶かしたとか何とか。

ガタガタガタガタガタガタ……。

盛り付け

「そのままにしておくで鍋まで溶けちゃいますから、すばやくガラスの器に盛り付けましょう。ガラスは溶けないので、安心してくだ  
さいね（ニコツ）」

試食

「アルさん。味見と感想を御願います」

「見た目は最高だ。」

「食べてください。」

「匂いだけで十分お腹が満たされた。」

「食べなさい。」

「綺麗なガラスの器だな。」

「召し上がね。」

姫路さんの料理を口に運んだ。

「しょうゆと砂糖でうまく味付けが出来ていて、食材の食感がしっかり残っている。何より舌がトロリと溶けるように……じゃあの。」

俺の意識はそこで飛んだ。

「あらあら、アルさんたら、牛になっちゃいますよ。では皆さん、さよ～なら～」

## 追記

料理番組はもう沢山だ！b yアルたん

EX1 化学兵器『ミスキ』！逃げる作者（後書き）

初めてのおまけ、どうでしたか？

PVが徐々に増えていくのを見ると、頑張れる気がします、有難う！

後は…姫路さんの真似をしないように！

## 登場人物紹介4（前書き）

今回はDクラスの主要メンバーの解説をやります。

PVが9000を突破しました。

この勢いで次へ次へいきます。



## 登場人物紹介4

平賀 源二（変更点のみ）

・かつて《皇王》と呼ばれ恐れられた。百人規模の生徒を率い、一大勢力を築いた。

・雄二や亮とは、『喧嘩する程仲が良い』付き合いで、鎧を削り合っていた。

・美春に豚呼ばわりされていない。美紀とは小学生高学年からの修行仲間。

・戦闘では3m以上の大剣や槍を用いる。

清水 美春（変更点のみ）

・男嫌いだが、実力が高く優れた者に対しては男女問わず敬意を持つ（恋路を邪魔する者は例外無く潰すが）。

・父は五ツ星レストランの元料理長、母は五ツ星ホテルの元バーテンダー。美春も幼い頃から料理修業に明け暮れていた。

・料理に必要な体力や集中力は身に付けており、戦闘もこなせる。フォークを投げ、フライパンの蓋でガードし、模造ナイフで近接戦闘をするスタイルでどの距離でも対応可能。

玉野 美紀（変更点のみ）

- ・昔は《皇女神》を名乗っていたが、神を否定し、《皇女》に至る。
- ・戦闘時は集中力を高めるために敢えて狂人となる。
- ・弓矢や剣は後付けに過ぎない。本来の使用武器は『二丁の鉄製ト  
ンファー』だ。実力は非常に高く、明久以上源二以下。

塚本 光太郎（変更点のみ）

- ・ボクシングとムエタイを合体させた独自の拳法を使用する。
- ・須川をして『間違いなくプロだ』と言わしめた実力：老朽化した壁にパンチで穴を開け、ピアノ線の入らない強化ガラスをキックで割る事が出来る。

- ・召喚獣はムエタイの選手がボクシンググローブを装着した感じ。

なかざわ  
仲沢 好美

身長 164cm

外見 金と茶のふんわりスウィートポップ

性格 浪速魂、負けず嫌い、マイペース

趣味 映画鑑賞

特技 水中で30分間息を止められる

好き 優しい、ノリの良い、熱血な人

嫌い 生真面目な人

・概要

大阪から来た《天才肌》。

祖父の『もつと落ち着いた人にならんかい!』の一言がきっかけで文月学園に転校してきた。

明朗快活にして限り無く野性的。

大阪にいる家族と親友は全員、半端ない強さとのこと；

喧嘩時には一切の武装を使用しない。

上半身はサラシのみ、下半身も伸縮ゴム製の短パンしか穿いていない。

スタイルは完全なまでにカウンター型：もれなく相手の戦術や知略を楽しめます。

・成績

全12科目において、120点前後を行き来している。

・召喚獣

転校したばかりらしく、まだ調整中なのだ。

現在はテストプレイ用の召喚獣を使用。

第9話 策と対話と卑怯者（前書き）

バカテストはありません

## 第9話 策と対話と卑怯者

視点：松下

「うあー……づがれだー」

「お疲れさん。船越女史の一件も片付いたし、良かったじゃねーか  
！」

へタレる明久に声をかける雄二。

今日は朝から昨日のDクラス戦で消費した点数の回復を目的とした  
補充テストを受けていた。

因みに船越女史の一件は、明久が近所に住むお兄さん（39歳／独  
身）を紹介する事で片が付いた。

「お疲れ様じゃ明久に啓吾よ。」

「……………（コクコク）」

何時の間にか近くに秀吉とムッツリーニが来ていた。

「秀吉は今日も可愛いな。」

「啓吾よ／＼／」

秀吉が照れる…本当に男子なのか？

「よし、昼飯食いに行くか！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな…買ったら屋上に持っていくぜ。」

勢い良く立ち上がる雄二からは疲れが感じられない。

「うん。俺は購買に寄ってから屋上に行くけど、明久はどうする？」

「僕も屋上に行くよ。」

「ウチは食堂に行くわ。今日、お弁当作ってこれなかったのよね…済ませたら屋上に行くわ。」

「……………購買に行ったらそっちに行く。」

「僕も屋上に行くとするかの。」

「わ、私も屋上に。」

「俺も行くぜ」

食堂に行くのは俺、雄二、美波、ムッツリーニの4人。

屋上に行くのは明久、姫路、秀吉、須川の4人となった。

-----

「今日も良い天気だなあ。」

須川は欠伸をしながら呟く。

「今日は黒胡椒と醤油も追加したよ。」

明久は弁当を広げた。

「明久、いつか死ぬぞ。」

俺は呆れて天津飯にスプーンを入れ、明久に分ける。

「啓ちゃん…命の恩人だあ。」

パクツと食べる。

「昔からなんだよな。明久の調味料癖は」

「昔からかよ！」

須川は日替ランチのウィンナーを明久の口に投げた。

「うん…明日は飯抜きにしよう、バチが当たるから。」

「明久よ、ほれ。」

秀吉の投げた卵焼きを明久は受け取った。



「う、これは！？う、うまああいつ！」

「美味しいと言われると、嬉しいのじゃ」

食事を終えて、暫くすると雄二達が屋上に到着した。

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？試召戦争のか？」

「うん、相手はBクラスなの？」

「ああ。そつだ」

雄二が美波の言葉に頷く。

「雄二、どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんじゃないの？」

島田の言葉に雄二は、

「正直に言おう。どんな作戦でも、Fクラスの戦力じゃAクラスに勝てやしない。例え、姫路が居ようが松下の一部の教科が高かろうが、それは個人の戦力だ。Aクラス相手じゃあつと言つ間に倒される。」

雄二の言葉に俺も姫路も頷く。

無理もない。

この文月学園はAクラスからFクラスの6クラスから成るが、Aクラスだけは格そのもの違う。まさに別次元だ。

五十人からなるAクラス生徒の内、四十人はまだ良いだろう。Bクラスより少々点数が上の普通の生徒ばかりだ。

だが、残りの十人がヤバイ。

首席の霧島翔子だけではない。久保 利光、木下 優子、習志野 桃花。あいつらの実力は想像を絶する。

例え、奇襲をかけ俺達が奴等を取り囲んだ所で、返り討ちが関の山だ。

どんな作戦でも、代表を討ち取れぬ限り勝利は無い。

止めを刺せない以上、俺達に勝ち目は無い。

「それじゃあ、ウチらの最終目標はBクラスに変更って事？」

「いいや、そんな事はない。Aクラスをやる」

「雄二、さつきと言ってる事が違うじゃないか」

美波の言葉を引き継ぐ様に明久が間に入る。

「聞け。クラス単位じゃ絶対に勝てない。だからこそ一騎打ちに持ち込むんだ。」

「一騎打ちに？どうやって？」

「Bクラスを使う。」

雄二の言葉に明久が首を傾げる。

「試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知ってるな？」

「え？も、勿論！……。」

（明久君、下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされるんですよ。）

姫路が明久に助け舟を出す。

「せ、設備のランクを落とされるんだよ」

「……まあいい。つまりBクラスならCクラスの設備に落とされる訳だ」

雄二が明久をジト目でみながら告げる。

「そうだね。常識だね」

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい！」

清々しい誤答に俺はイラッとした。

「松下。」

「自作ペンチだ。殺れ。」

「ややつ。僕を爪きり要らずの身体にする動きがっ」

「雄二も啓吾もやめてやれよw」

須川が雄二と俺の肩を引つ張った。

「相手と設備が入れ替えられちゃうんですよ」

またしても瑞希のフォローが明久に入る。

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるんだね」

「ああ。そのシステムを利用して、Bクラスに交渉する。」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むように交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。旨くいくだろう。」

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな。」

いい作戦だ。

俺は素直に雄二を評価した。

学年二番手のクラスと戦った直後に休む暇もなくまた戦争。

これはキツイだろう。

Fクラスも連戦になる…だが、体力のあり余る俺達にとっては何ら問題ない。

だが、Aクラスはそうではない。

勝つても得られる物も無く、Fクラス相手に時間を浪費するのは嫌な筈だ。

モチベーションの差は歴然としている。

「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争の方が確実にあるのは確かじゃからな。」

秀吉が疑問に思っているのもっともだ。

「そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろうか？此方に啓吾がいるということは既に知れ渡っている事じゃろう？」

FクラスがDクラスに勝ったとなると、当然その勝ち方に注目が集まる。

俺の存在は周知の事実だ：姫路がDクラスにしか知らされていない  
とはいえ、相手は彼女の行方を探す筈だ。

「その辺に関しては考えがある。心配するな。」

皆の不安と対照的に自信満々な雄二。

「兎に角Bクラスをやるぞ。細かい事はその後に教えてやる」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

いくら雄二でも勝算無しにこんな事は言わないだろう。

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら…。」

雄二の言葉を俺が遮る。

「雄二。明久にまともな交渉は出来ない…《絶対悪》のこともある。」

雄二は俺を見る。

「それもそうだな。バカ久は何をするか分からんし。松下に任せる。  
会議は終わり…どうした姫路？」

姫路はもじもじしている。

「あ、あの。」

「何？」

「吉井君はいつもそんなお食事なんですか？…迷惑じゃなかったら、明日皆さんに作りますけど。」

「「御願います！」」

須川と明久が土下座した。

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ。」

姫路の弁当…イエエエエイツ！！

「迷惑なもんか！ね、雄二、啓ちゃん！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「是非とも。」

「そうですか？良かったあ」

「むー……っ。瑞希って、意外と積極的なのね……。」

「……島田、がんばれ。」

「明日が楽しみじゃ。姫路よ、有難っ」

「女の子の手作り弁当か…キョロキョロ」

「良かったな須川。」

「それならウチも作るわ！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

島田も自信満々そうに腕捲りした。

「悪いな。それじゃ頼む」

「は、はい！」

「無理はするなよ。」

「大丈夫。ウチは体力には自信があるの」

島田と姫路は先に教室へ戻って行った。

俺達も卓袱台を片付けてから、少しばかりDクラスの生徒たちと交流し、教室へ入った。

.....

俺は完全武装をした。

制服の下に防刃ベストを付け、背中に模造刀を付け、ポケットの中



に煙球を仕込み、暗視スコープを装着する。

明久は…装備無し。

「とうわけで明久、午後のテストが終わったら松下と共にBクラスに宣戦布告に行け。」

下位勢力の宣戦布告の使者は酷い目にあうよな。

「断る！雄二が行つてよ！」

「やれやれ…ジャンケンで決めるか。」

「よし、望むところだ！」

俺は無心になる…《武器職人》の真の強さを引き出すべく。

「ただのジャンケンじゃ面白くない。心理戦ありで行こう。」

駆け引きか…。

「じゃあ僕はグーを出す」

「それじゃあ俺は…明久がグーを出さなかったら打ち殺す」

心理戦の欠片の一つも無いんかい。

「いくぞ、ジャンケン……」

「ぽ、ぽ、ポン！」

パーヴスグー

「こ、この僕が負けた…」

明久…後出しで負けるとはな。

「よし、逝ってこい明久。」

「絶対に嫌だ！」

「Dクラスのと看みたいに殴られるのを心配しているのか？」

「言つまでもない！」

「それなら今度こそ大丈夫だ。保障する…松下がなっ！」

「俺かよ！」

雄二はニヤツとする。

「Bクラスには美少年好きが多い」

「そつか、それなら大丈夫だね。」

「でも、お前不細工だしな……」

「失礼な！365度どこから見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ〜！」

実質5度だな…。

「微妙じゃのう。」

「皆大嫌いだ!!!」

俺は明久を慰めるのに小一時間かった。

- - - - -

15:00

昼休み、そして午後の回復試験をこなした俺は明久と一緒に新校舎の屋上で佇んでいた。

カッカッカッ

ボブカットの男が手を挙げながら、俺の前に立ち止まった。

「今日は俺の我儘を聞き入れてくれたこと、感謝する。」

「ふん…定刻通りの到着とは、良い身分だな。」

「悪かったな、松下。」

「まあいい。卓袱台と座布団を用意してやったから、とつとと座れ。」

俺と根本は卓袱台を隔てるように座る。

「まさか…お前がFクラスとはな。バカが感染ったのか？」

「お前の卑劣さに影響されるよりはマシだな。」

「おやおや、悪口をぶつける為に俺を呼んだのなら帰らせてもらおうが…まあ良いとしよう。Bクラス代表の根本恭二だ。よろしく。」

根本は握手を求めたが、明久は拒んだ。

「画鋏なんかねーよ。で、松下…用件は何だろうか？」

俺は大きく明瞭に叫んだ。

「俺達Fクラスはお前の率いるBクラスに宣戦布告する！！！！」

十数羽の鴉が飛び立った。

根本はピュウツと口笛を吹く。

俺は奴に憎しみを籠め、私情を挟む。

「以前からお前は目障りだったんだ。これを機に、引導を渡してやるから、部屋の隅でガタガタ震えて命乞いする準備をしとくんだな…棺桶くらいは用意してやるよ。」

「そこまでする必要は無いと思うが」

焦る根本。

「お前は、世間の規則に従順な『お子ちゃま』じゃないからな。二度と立ち上がれなくなるまで、叩き潰してやる。」

状況を把握したのか、根本は首を傾げながら返答する。

「冗談には聞こえないな…お前らのような卑怯で冷酷なクズは何をするか分からない上に、どんな手でも躊躇無く使ってくるからな」

「それをお前が言うのか。」

俺は嘲笑する。

「俺はお前らのようにバカでも無ければ、性悪の小物でも無い。『卑劣さ』の度合いが違うんだよ。」

「性悪で卑怯な小物が代表とは…Bクラスの連中には同情せざるを得ない。」

根本は背筋を伸ばす。

「人望が無いから、自分勝手にやれるのさ…。」

俺は冷笑を浮かべる。

「だから傲慢で器量が小さいんだよ。所詮は、Bクラス…俺たちの敵じゃないな。」

「根拠もない自信は何処から湧く？」

「さあな？ま、《小山 友香》を盾にしているようでは、卑怯な手を使う覚悟つてのが出来ていないらしい。」

根本は、ハハハと笑い、

ドンツ！

と、卓袱台を強く叩いた！

「図に乗るな！さつきから聞いてりゃ、馬鹿にしゃがって！！！！何が言いたい！？」

根本が俺の襟首を掴む。

「Fクラスが恐いからCクラスを後ろ楯にしたんだろ？」

根本は卓袱台に爪を立て、睨んできた。

明久は畏縮しているが…。

「離せ。」

「けっ、Fクラスごときが。」

根本は手を離した。

「さて、開戦の時刻は？」

根本はかなり気が立っていたが…直ぐにその表情は消える。

「明日の午後2時から…ただし、午後5時までに勝敗が決まらなければ。」

「決まらなければ?」

「戦闘を中止し、午後5時の状態を保ったまま、次の日の午前9時に持ち越し…というのはどうだ。」

「理由は?」

「Bクラスには、予備校に行っている者が少なくない。戦争をするのは言いが、学業が疎かになるのは戴けないだろう?」

「本当にそれだけか?」

「それだけだ。」

…大した男だ。

根本が小物ならば、今の挑発を自身に向けられたとして、怒りを隠しきれずにヒステリックになり、冷静さを保てなくなる。

しかし奴は見事、『クラス代表』として、役割を果たしきったのだ。人格と人望を除けば、是非とも欲しい人材…というのが俺の本当の気持ちだった。

「どれだけ無能だったとしても、お前はクラス代表だ…全てをぶつけてやるから、せいぜい、そのつまらない頭を回転させ、卑怯な作戦でも立てておくんだな。」

「そうか。」

根本は、捨て台詞を吐くように屋上を去っていった。

- - - - -

明久が俺に寄り添ってきた。

「啓ちゃん…ちょっと酷すぎない?」

「あれくらいで、あの男は揺れ動きはしない…正直、あそこまで冷静とはな。畏れ入る。」

「感心してる場合じゃないよ!根本君がどれだけ恐い存在か、知ってるでしょ!?」

「知っている。だから敢えて、安い挑発とハツタリを続けた。」

「つまり…どついついことだってばよ?」

俺は明久に全て説明した。



・昼休みに根本が明久をボコボコにしなかったのは、明久を下手に血祭りに上げれば、Fクラス中の憎悪を受ける事に繋がってしまうから。

・根本の手引きで明久と俺が無傷で帰れば、Fクラスの生徒は根本に対し疑念を浮かばせ、不安を煽ることになる。

・そして、俺と明久を新校舎の屋上で待ち合わせをするように指示を出す。Fクラスの生徒に二人を人質に取ったと思い込ませれば…動きを制限する事が出来る。

「要するに、根本はこの3つの目的を、話し合うまでに全て達成していたんだ。後はBクラス側の情報を言い漏らさなければ、挑発に乗ろうがハツタリに動揺しようが、どうでも良かったのさ。」

「な、なるほど…」

「冷静に考えれば簡単な作戦だ、引つ掛かる道理はない。しかし、『根本＝恐怖』という観念が、俺達を疑心暗鬼にさせ、冷静さを欠くことになった。」

俺は明久に先に教室に戻るよう指示した。

屋上で一人きり…俺は唇を噛んだ。

最初の対決は、完全な敗北だ。

根本はこうなる事を予想した上で、俺との対話を望んだ…見事に『自分を危険に曝さない』ように。

だが逆に手に入れた情報は大きい。

携帯が鳴った。

「土屋。成果は。」

『……………お前が話を長引かせてくれたお陰で教室に忍び込むのは簡単だった。Bクラスの生徒の人間関係を調べたが面白いことが分かった……………今日の夜に雄二とお前にメールを送る。警戒が厳しいので切らせてもらおう。』

ツー、ツー、ツー……………。

俺は携帯を閉じ、旧校舎へ向かった。

明日は…天気も学園も大荒れになるな。

## 第9話 策と対話と卑怯者（後書き）

皆様：本当に感謝感激であります。

3週間でPVが、10000を突破しました！

オリ展開を入れるのは難しいですが…これからも頑張ります!!!

次回からBクラス戦が始まります…かなり長くなると思いますが、ご了承ください！

第10話 Bクラス戦開幕…悲劇の連鎖(前書き)

問 以下の空欄を埋めなさい。

「女性は( ) ( )を迎える事で第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める。」

姫路瑞希の答え

「初潮」

・教師のコメント  
正解です。

吉井明久の答え

「明日」

・教師のコメント  
随分と急な話ですね。

土屋康太の答え

「初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経と言う。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43?に達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪

れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される」

・教師のコメント  
詳し過ぎです。

松下啓吾の答え  
「禁則事項です。」

・教師のコメント  
何を想像したんですか…。

須川亮、横溝浩二の応え  
「俺との出会い」

・教師のコメント  
欲望を書かないで下さい。

坂本雄二の答え  
「鬼嫁への変身」

・教師のコメント  
女性関係で悩みがあるなら、相談してください…解決の道を探しま



## 第10話 Bクラス戦開幕…悲劇の連鎖

視点：恭二

昼休み…俺は2人で食事をしてた。

「と、いうわけで…Fクラスと闘う事になった。」

「面倒な状況になったね…大丈夫？」

「策は用意している。」

俺は、稀代の美少女、『芳野 智里』に報告していた。

芳野は、珍しく俺に友好的であるらしい。

「策？」

「説明は開戦直前だ…盗聴される可能性がある。」

俺はポケットから小さな黒い機械を取りだし、潰す。

「うわ……………」

「俺や水瀬さんが居ない間にな。連中、やりたい放題だ。」

芳野は息を飲んだ。

「奴等の手足は想像以上に長い。油断すれば敗北は必至だ。」

「どうすれば、誰にも気付かれずにそんなものを仕掛けられるんだろ。」

「学年中が2・Fの話題で持ちきりさ…混乱に乗じて、仕掛けた。」

「恭二君の言う『ムツツリーニ』君は、危険なんだね。」

「ああ。一番の厄介だと思う…奴にプライバシーを隠し通せる人は、水瀬さんくらいだろうな。」

策士として暗躍した為に、表向きな仕事をする『代表』を務めた経験が無いせいかな…参謀をやってるみたいだ。

「恭二君…Bクラスで有用な人は？」

「御前と水瀬さんならよく知っているが」

一区切りして続ける

「芳野は近衛部隊にして特秘事項だ…现阶段では、表には出せない。水瀬さんは…最前線で指揮を執るタイプだ。前衛に置かなければ、利点を潰す事になる。」

芳野はうーん、と考え、意見を述べる。

「恭二君…私が代表代行になるよ。」

「いいのか？代表代行は仕事は多い…全力で補佐するが、臨機応変に的確な指示をする指揮能力が必要だ。」



「やれるだけやってみる。」

「戦争の準備が整った。」

俺は芳野の真つ直ぐな意思を汲み、

「Fクラスに敗北し、弱小クラスという肩書を貼られる訳にはいかない。仮に負ければ：途端にDクラス、Eクラスが特攻に来るのは明らかだ。負けられない戦い、厳しい闘いになるが：覚悟はあるか？」

「覚悟：あるとは言い切れないけど、私はいつも貴方の味方だった。」

「お前は本当に優しいんだな。」

俺は芳野の頭を撫でた。

「恭二君？」

「ちょっと昔を思い出してな。」

「そう…2時までもう少しだね。」

「そうだな。水瀬さんに連絡しよう。」

俺はBクラスの代表にのみに支給されるノートパソコンを広げ、水瀬さんとのコンタクトを開始した。

水瀬さんは退院後、リハビリついでに、学校に内緒で、バイトや内職でお金を稼ぎまくったらしい…4ヶ月で150万貯めたんだと（笑）

そして最新モデルのノートPCを自腹で購入したそうだ。

俺はスカイプを立ち上げ、水瀬さんとコンタクトをとることに成功した。

「あー、あー、マイクテスト。水瀬さん、聴こえますか？」

『大丈夫だよ。今3-Fで隼人と喋ってきたんだ。下が煩くて居眠り出来ないって困ってた。』

「今どちらにいますか？」

『新校舎の時計塔の天辺だけど？』

「どうやって登ったんすか…てか、今日雷雨でしょう…」

『傘持ってるし、慣れたら簡単さ。で、どうした？』

「五時間目が終わったらすぐ半に作戦会議するんで、来てくださいね。」

『直接言いなよ。授業は出るからさ。』

「いや、試験召喚戦争でも使うんで、テストしたかっただけなんで

す。」

『ああ、成る程。…休み時間が終わるみたいだから、戻るよ。』

「だからと言って、そこから飛び降りて窓から侵入しないで下さい  
…吃驚するんで」

『あいよ。精密機械は丁寧に使わないといけないからね。』

俺はパソコンを閉じる。

「芳野。十分休んでおけ…長い闘いになるからな。」

「はい。」

- - - - -

視点：啓吾

翌日。四時限目が終わり、昼休みが来る。

「今日は姫路の手作り弁当か。」

「ああ…楽しみだ。」

坂本と俺は、立ち上がる。

「……………だが外は生憎、雷雨。」

外は真昼なのに、暗い。

秀吉が俺に近寄って話しかけてきた。

「昨日とは違ってかわって、酷い天気じゃのう。」

嫌な予感がよぎる。

「でも、私は皆さんと一緒に過ごしてるだけで、楽しくなりますし、雷なんて怖くないです。」

姫路は優しいんだな。

「お喋りはこの辺で。今日は5Fの多目的広場で食べようぜ。俺は飲み物でも買ってこるから先行つてろ。」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

「俺達の分とっておけよ。」

「大丈夫だつてば、あんまり遅いとわからないけどね。」

「そう遅くはならないはずだ。じゃ、行ってこる。」

坂本と島田は財布を持って一階の売店に向かっていった。

「僕らも行くろうか」

「そうですね」

吉井は姫路が抱えていたバックを受け取る。そして俺達は屋上まで歩く。

.....

「「「ひ、広い! ! !」」」

多目的教室は非常に広く、1000人は収容出来る広さだ。

弁当を食べるにはもってこいの場所。

ここには俺達以外はいないらしく、貸しきり状態だ。

「気持ちいいね!」

「.....」(コクリ)

「清々しいなあ。」

「あの、あんまり自信はないんですけど.....」

姫路が重箱の蓋を取る。

「「「おおっ！」「」」

俺達は同時に歓声をあげた。

から揚げ、エビフライ、おにぎり、アスパラ巻き……重箱には夢が詰まっていた。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先にー」

「……（ヒョイ）」

「あっ、ずるいぞムツツリーニっ」

吉井が取ろうとしたエビフライを土屋が素早く摘み取る。

「まだ慌てるような時間じゃない。」

「まあ、それもそうだ」

バタン！！！

ガタガタガタガタ……トサアツ。

俺が明久を諭した直後……土屋が豪快に倒れ、小刻みに震え……死んだ。

「……」

「……」

「……」  
「……」

俺、明久、須川、秀吉は顔を見合わせる

「わわっ、土屋君!？」

姫路が慌て、配ろうとした割り箸が散らばった。

「……(ムクリ)」

起き上がる土屋。

「……(グッ)」

そして、姫路に向けて、親指を立てる。

「あ、お口に合いましたか？良かったですっ」

土屋の言いたい事が伝わったらしく姫路が喜ぶ。

しかし、土屋の足は未だにガクガクと震えている。

「良かったらどんどん食べてくださいね」

姫路がどんどん笑顔で勧めて来る。

……。

姫路に聞こえないくらいの小声で4人で会話する。

( どう考えても演技には見えぬ )

( ってことは、今のアイツ相当やばくないか？ )

( だよ。ヤバイよね )

( 吉井に松下。身体は頑丈か？ )

( 正直胃袋に自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるか  
ら )

( そっちの方が深刻じゃないか…でも姫路の弁当は喰いたくない。 )

( ならば、ここはワシに任せてもらおう )

無謀にも秀吉が名乗りを上げる。

( そんな、危ないよ！ )

( 大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋をしていてな。ジャガイモの  
芽程度なら食ってもびくともせんのだ )

おお…というか、喰ったんかい；

( 安心せい。ワシの鉄の胃袋を信じて )

木下が、頼もしい台詞を言おうとした時、

「おう、待たせたな！へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」



坂本が現れた。

「あつ雄二」

吉井が止める間もなく素手で卵焼きを口に放り込み、

パクッ！

ボタンーガシャガシャン！！！！

ガタガタガタ……………ドウッ

ジューズの缶をぶちまけて倒れた。

あの《悪鬼羅刹》が一発でくたばった！？

「さ、坂本！？ちょっと、どうしたの！？」

遅れてやってきた島田が坂本に駆け寄る。

坂本は土屋と同じように震えている。

「あ、足が……………攀ってな……………」

そのザマで姫路に気を使うか…凄すぎる。

「あ、はは、ダ、ダッシュで階段の昇り降りしたからじゃないかなあ、かなあ？」

「うむ、そつじやな」

ギリギリ過ぎる……

「そうなの？坂本ってこれ以上ないぐらい鍛えられてると思っけど」

島田が不思議そうな顔をする。

「ところで島田さん。その手についてるあたりにさ」

吉井がビニールシートに腰を下ろしている島田の手を指差す。

「ん、何？」

「さっきまで、虫の死骸があつたよ」

「ええっ！？早く言ってよ！」

島田は慌ててよろける。

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方がよいよ」

「そつね。ちよつと行ってくる」

明久の素晴らしい嘘…島田の命は護られたのだった……。

さて、この悪魔をどうするか。

（明久、今度はお前が行け！）

(む、無理だよ！僕だったらきつと死んじゃう！)

(流石にワシもさっきの姿を見ては決意が鈍る……)

(坂本…生きているなら、何とかしろ)

(……………。)

(どっぴうことだおい…こいつ、死んじまってるじゃねえか…)

(須川君！FFF団の団長なら！)

(無茶言うな！)

(ならば！)

明久は窓を指差し、

「あっ姫路さん、UFOだ!？」

「えっ?どこ、何処ですか!？」

吉井の指した明後日の方向を姫路が見る。

(おらぁ!)

(も…あぁっ!?)

明久は坂本の口の中に弁当を押し込んでいた…今度こそ死んだな。

「ふう、これでよし」

「……お主、鬼畜じゃあ（ガクブル）」

明久は、秀吉をスルーした。

「姫路さんごめん、見間違いだっただよ」

「そ、そうですか……。」

残念そうにする姫路。

「あれ、早いんですね。もう、食べちゃったんですか？」

「うん、雄二が『美味しい美味しい』て凄い勢いで」

「そうですかー嬉しいです。」

「いやいや、こちらこそありがとう。ね、雄二？」

「う……う……。あ、ありがとうな姫路……。」

目が虚ろだった。

土屋も再度グーサインを出す。

「あの、実はですねー」

「ん、どうしたの？」

姫路が鞆を探る。

「デザートもあるんです」

「デザートならば大丈夫!!!」

須川が素早く取り、アップルパイを食す。

ハムツ…ダツ!

立ち上がる須川。

涙を流している。

「舌が融けるようなつま…さっ!」

ドサアアアッ!!!

(明久!次は俺でもきつと死ぬ!)

坂本がゴロゴロ転がり、逃げる。

(ワシがいこう。)

(秀吉!?無茶だよ、死んじゃうよ!)

(秀吉:考え直せ。)

(大丈夫じゃ。ワシの胃袋はかなりの強度を誇る。せいぜい消化不良程度じゃろっ)

ラスボスに木の棒だけで挑む勇者がいる；

「どうかしましたか？……あっ！」

姫路が顔を曇らせる。

まさか、嫌がったのがバレたのか！？

「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れてきちゃいましたっ」

（（天然過ぎるー！ー！））

ズコーツ！！！！

階段を下りていく姫路。

「では、この間に頂くとするかのう」

秀吉が容器に手を触れる。

「……………気を付ける。」

「木下、お前がナンバーワンだ。」

「秀吉。君のことは忘れない。」

「お前も意外と命知らずなんだな、感謝する。」

「死ぬなよ。」

俺達5人の希望が託された。

「別に死ぬわけでもあるまい。そう気にするでない。」

容器を傾け、一気に口に…かきこむ。

「むぐむぐ、なんじゃ、意外と普通じゃとゴバあっ！」

自称『鉄の胃袋は』白目で泡を吹いた。

「…雄二」

「…なんだ？」

「…さつきは無理に食べさせてゴメン」

「…わかってもらえたならいい」

明久は残りのおかずを食べ、昇天した。

俺は、おにぎりを取り出す。

パクパクパク……。

梅が入っているよう……ゴバアッ……！！

『満身創痍！』

「最初からやり直す」

「このステージからやり直す」

「リプレイに保存する」

「ゲームをやめる」

- - - - -

視点：明久

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

全ての回復試験を終えたFクラス。

教壇に立った雄二は皆の方を向いている。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

「「「おおーっ！」「」」

一向に下がらないこのモチベーションはFクラスの武器と言っても過言ではない



僕は殺る気を出す。

「明久、ここまで来て今更逃げるなよ？」

「明久：言い出しつぺなんだからしつかり頼む。」

雄二と啓ちゃんに最終確認を取る。

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルがBクラス戦開始の合図となった。

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

「「「うおおおおっ！！！！」」」

僕たちの大半が、全力でBクラスへと向かうべく、廊下を駆け出した！

**第10話 Bクラス戦開幕…悲劇の連鎖(後書き)**

何だかんだで、10話目を更新しました。

ユニークが2000間近…達成する日が待ち遠しいです^^

次回からBクラスとの闘いが始まります。

読者の皆様に感謝。

第11話 シンクロを捉えろ！最強ペア発進（前書き）

バカテストはお休みです。

## 第11話 シンクロを捉える！最強ペア発進

視点：啓吾

BクラスVS Fクラス…苛烈を極める闘いとなっていた。

「いたぞ、Bクラスだ!!」

「高橋先生を連れて居るぞ!!」

昼休みのチャイムが鳴り終わると同時に、戦いは始まった。

前線の指揮は俺と姫路に任せられ、突撃するのは明久と秀吉となった。

「松下君は、中堅部隊なんですね。」

「現国、理科、家庭科、音楽美術はFクラス並なんだ…。」

「私も同じです。文系科目はちょっと苦手です。」

根本は15人を寄越してきたな…こちら、突撃するFクラスは30人。

今回も渡り廊下を制することが最重要項目…しかし。

Bクラス 野中長男 1976点  
Bクラス 金田一祐子 2002点  
Bクラス 里井真由子 1948点

V S

Fクラス 近藤吉宗 794点  
Fクラス 武藤啓太 819点  
Fクラス 君島博 775点

Dクラスとは格が違うな…乱戦に持ち込み、こちらは7人撃破したが、11人落とされた。

「やられそうな奴は回復試験に行け！」

フィールドが数学ならば、戦える。

《数学》

Bクラス 工藤信二 175点

V S

Fクラス 松下啓吾 337点

「なにつ!?!」

「全教科出来ないとは言っていない。」

「まじかよ!?!」

召喚獣の武器は基本的には近接武器。

銃や弓と言った遠距離武器は少ない。

つまり…ホームグラウンドで戦う場面が多いって事だ。

「1人撃墜。」

「Bクラス、真田由香。松下啓吾に数学勝負を!」

「野中長男も松下に!」

「殺られるものか!」

「啓吾よ、助太刀いたす!」

### 《数学》

Bクラス 真田由香 217点

Bクラス 野中長男 142点

V S

Fクラス 松下啓吾 304点

Fクラス 木下秀吉 88点

「野中は疲弊している。押し込むぞ！」

「承知した！」

点数を見て、敵二人が秀吉に飛び掛かる！

「点数が低くとも！」

「迂闊だな！」

敵召喚獣にナイフを飛ばし、武器でガードさせ…硬直を狙うように、日本刀で武器を破壊する。

「し、しまった！」

「ハアアアツ！！！」

そこをすかさず、敵召喚獣の首を撥ね飛ばす！

「秀吉が押されている！」

「野中をぶちのめせっ！」

「1対3に持ち込まれ…グウツぬう！」

数で追い詰め、野中が餌食となる。

「秀吉、よく耐えた。」

「しかしまだ油断は出来ぬ。」

「よし、松下と秀吉に続け！！」

しかしBクラスも負けじと攻めてくる！

「古典で松下啓吾に勝負を仕掛ける！」

「古典は得意だが…最近調子が悪いな。」

「Fクラスには負けないわ！金田一祐子、木下秀吉に古典で勝負します！」

「ワシも得意じゃ、啓吾はもう一人を頼む！」

### 《古典》

Bクラス 鈴木次郎 247点

Bクラス 金田一祐子 261点



「流石は文系専門じゃのう。」

「だがこちらも点数は持っている！」

Fクラス 松下啓吾 270点

Fクラス 木下秀吉 237点

「Aクラス並とは、驚いた。」

「啓吾の足は引っ張れぬからの。」

「Fクラスなのは総合科目だけってことか…金田一！」

「やるしかないでしょっ」

敵召喚獣の攻撃を、薙刀で捌く秀吉…演劇部主将の名は、伊達では無い！

「止めじゃー！」

「惜しかったな…名前だけは覚えてやる」

「た、確かに強い…だが、」

「あの二人には勝てない…わ。」

ドサアッ、ドスウッ

数学の教師のフィールドに撤退した。

古典の点数を70点未満にまで減らされるとは…根本のクラスメイ  
トも捨てた物ではないか。

「お、遅れ、まし、た……ごめ、んな、さい……」

「姫路よ、大丈夫かの？」

「はい……平気、です……」

息絶え絶えだが…勝負の女神が舞い降りた

「まさかね…代表がもしやと言っていたけど。」

「姫路さん…Fクラスだったんだ。」

二人の少女が迫り来る。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です！Fクラス姫路瑞希さんに、  
数学勝負を申し込めます！」

「律子、手伝うわ！」

ただならぬ雰囲気…土屋の情報が正しければ、

「姫路、俺も援護する。あの二人は…強い。」

「は、はい…」

岩下と菊入だったな…。

「サモン!!」

《数学》

Bクラス 岩下律子 257点

Bクラス 菊入真由美 242点

Aクラス並…俺は点数を消費しているから、苦戦は避けられないな。

「受けます。試験召喚!」

魔方陣と数字が浮かび上がり、姫路の召喚獣が登場した。

岩下と菊入はその姿に驚愕する。

「あつ、腕輪!」

「腕輪：400点をオーバーした者だけが使用できる特殊能力を秘めているらしいわね。」

「でも…点数差は、数で埋めれば!」

《数学》

Fクラス 姫路瑞希 458点

Fクラス 松下啓吾 243点

ちよwたけえwって、マジか！

姫路：理系科目だけの総点は、霧島さえも上回ると聞いたことがあるが、これ程とは思いもなかった；

Fクラスの生徒もBクラスの生徒、そして観戦している者も、彼女を見ずにはいられない！

「律子：アレをやるわよ。」

「そつね：行きましょう。」

岩下と菊入が、手を取り合い頬と頬を密着させた。

スウッ

なん、だ、この、い、わ、か、ん、は

「「岩下は二人、菊入は二人。貴女は私、私は貴女。」

「百戦錬磨の」「強者たちを」

「「討ち取る一つの闘志なり。」

演舞を始める二人。

素晴らしい。

噛み合っている…まさか!?

「あれは『同調』です!」

「「よくご存知で!」」

『同調』とは、テニ又漫画の技の1つだ。

シンクロ  
同調

・テニスやバドミントンなどの競技の、ダブルスでのみ発動が可能。

・サイン無しに、お互いがお互いに、次の動作、次の思考を先読みし、正確に判断出来る。

・故に、隙なく無駄なく動ける。

何故姫路が知っているかはさておき、あの『同調』は本物だ。

「姫路…俺が前に出る。」

「はい。」

Fクラスの『最高得点』ペアとBクラスの『同調』ペアが…激突したのだった。

- - - - -

視点：雄二

14：38

俺は卓袱台でバリを組み、ブルーシートで窓という窓に被せた。

教室にはムツツリー二と近衛部隊が5人いる。

「ムツツリー二。状況を報告しろ。」

「……………根本は人望が無い。クラスを動かしているのは芳野と水瀬

先輩。」

「ヤツは今何してる？」

「……………大きな動きは見られない。が、松下が取り付けた協定にも裏がある可能性はある。」

「ふむ。『17時までには決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し。それと、その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。』姫路の体力を考えれば、長期戦は無謀だ。こちらに有利と思つて承認したが、怪しい。」

「……………しかし、変なものだ。あの根本にしては、真っ直ぐで素直過ぎる。小細工をしてこない。」

「『喧嘩に刃物は常時装備』、『カンニングの天才』、『裏切りのポーカーフェイス』、『八百長とヤラセの演出家』…そう呼ばれた男が何もしない筈がねえ。」

「……………根本は卑怯でクズだ、しかし、冷静沈着で、決して感情を前に出すような小物ではない。」

「ああ。松下と明久と対話していた間の根本の行動。あれは、」

「……………間違いなく演技。」

「おそらく人望が無いのも嘘だ、な。」

やはり、一筋縄ではいかねえか。

「……………気付いているのは俺とお前と松下だけだな。他の連中は奴への憎しみで、何も見えていない。」

俺はニツとして、

「だからこそ、纏まるんじゃねえのかな…共通の敵を見れば、協力する。Fクラスの人間はそういうタイプなんだよ。」

「……………《卑怯者》と《曲者》。お前はどちらだ？」

「ティッシュ一枚の差…孤立するか、率いるか…ただそれだけの違いだ。」

「……………流石は『悪鬼羅刹』。悪鬼と羅刹の二つの側面を持つ男は、面白い。」

ムツツリーニと俺は拳を合わせた。

「世間話はここらで切るぜ。明久は？」

他の面子の動向を確認する。

「……………水瀬さんにタイムンを持ち掛けられた。」

「で、どうした？」

「承諾した。15:00から運動場で、『家庭科』の召喚獣バトルをするらしい。」

「三年前に、木刀を所持していない明久を潰すような真似をした自



分が気に食わなかったんだろうな。」

「……………勝ち目はあるか。」

「ゼロだ。しかし、一矢報いると信じている。」

ガラッ

横溝がムッツリーニに紙切れを渡す。

ガラッ

「……………松下と姫路は岩下&菊入ペアと交戦中。明久は水瀬さんとの闘いの準備中。須川は加西を撃破した、との事だ。」

「そうか。残存兵力は？」

「……………Fクラス31人、Bクラス26人。だがFFF団の士気が下がりだした。」

「成績の格差は埋めきれないか。ならば、少し強硬となるが、保険をかけておこう」

俺はポケットから、紙を取り出し、ムッツリーニに手渡す。

「……………シンプルかつ、素晴らしい。」

ヒュバッ

ムッツリーニは消え去る。

…ここからが本当の勝負だ！

.....

視点：啓吾

「律子」「真由美」

「頑張ろつね」

到底、微笑ましくは思えない。

格闘家風の服装にハンマー装備と、剣士風の服装にメイス装備か。

「姫路！」

「は、はい！」

姫路の召喚獣に装着されている指輪が光輝いた。

「《ハイ・メガ・キャノン》！！！！」

激しい轟音と共に極太のビームが迫る！

「クッ！！」

一撃必殺のビームに対して、岩下と菊入の召喚獣は左右に避ける。

「姫路！擬似タイマンで、分断しろ！」

「はい！」

「律子」「真由美」「挟撃に出る！」「」

俺と姫路を挟み撃ちするように動いてきたか。

俺は半ば特攻するように、突っ込む。

「ちいい！」

岩下のハンマー…『ウォーハンマー』か。

ウォーハンマーは、鎚状の柄頭を備えた殴打・打撃用武器だ。

基本的な構造は『金槌』や『トンカチ』と同じで、柄の先に垂直に接合された鎚頭を備える。

頭の両端が打撃部位となっており、どちらかを相手に打ち付けるように振って使う。

ウォーハンマーの形状は大きく2つに分けられ、

直方体や円筒型のいわゆる槌型と、

片方を鈍頭として反対側につるはしや斧を組み合わせた型がある。

槌は旧石器時代から使用されていた人類の基本的な工具の一つで、道具としてのみならず狩猟や戦闘にも使用された。

『武器』専用として活躍し始めたのは、金属製鎧による重装化が進み、十字軍の戦訓などから、それら堅固な鎧にも有効な打撃武器が見直される動きが起きた頃からだ。

ウォーハンマーは打撃用武器の一つとして13世紀頃から使われはじめ、14世紀から16世紀にかけては一般的な武器の一つになっていた。

銃の登場により殆どの大型のウォーハンマーは廃れてしまったものの、

杭を打つのに使用する障地作成に欠かせない工具であり、純戦闘用が開発されていないものでも、急場の戦闘に用いる事が出来るため、現在でも重宝されているのだ。

「ハンマーは近接武器の創造にはもってこいの工具でな…敵に廻すと怖いなあ！」

「ダアアアツ」

ズドオツ!!!

轟音を上げるウォーハンマー。

凄い威力だ…受け止められない！

召喚獣の点数差も少ない…直撃すれば、日本刀ごと肉体が潰されるな。

「しかしどでかいハンマーだな。」

平賀や姫路の大剣に匹敵する大きさだ。

反面日本刀はせいぜい5尺いくかいかない程度…こりゃあ、突っ込まないと。

「こ、攻撃が当たらない！」

「そりゃそうだ。出が遅いからな。」

ハンマーは、横に振るか縦に振るかの二択しかない。

闘い方は単純な上に、非常に重く、動きは鈍くなりがちだ。

加えて岩下は召喚獣の扱いがまるでなっっちゃあいない。

「20n2なら断然有利なのに！」

「お前らの戦い方に合わせるバカが何処にいる!？」

「一騎討ちだなんて、聞いてない！」

「日本史で習わなかったか？昔の武将さんな、名乗りを上げて一騎討ちしたもんだぜっ！」

「じ、こんのおー！！！！」

岩下が自棄になり、ウォーハンマーを横に振った！

ゴッ！

俺の召喚獣の腰辺りに打ち当たる。

「殺ったか!？」

カランカラン！

折れたナイフが辺りに飛んでいく。

「殺ってないフラグ…せ、い、り、つ。」

戦死は免れた…ナイフが衝撃を和らげたのだろう。

「…捕らえた。」

「うそだっ！こ、こんなことって！」

ウォーハンマーをつたい、岩下の召喚獣の肩から胴を日本刀で切り飛ばす。

「俺の勝ち…鉄人がお待ちかねだ。」

「西村先生の補習は、いやぁーっ！」

岩下は鉄人に担がれていった。

.....

視点：真由美

「タイムンかぁ…苦手なんだよね。」

「……………」

「しかもあの姫路さんが相手だなんて…律子が羨ましいわ。」

「菊入さん、済みませんが…倒されてください！」

「シンク口を潰した程度で、勝てると思うっ!？」

…強がっている私がいる。

( 姫路さんのとの点差は約二倍……やばいかも。 )

松下君に押されている律子を横目に、召喚獣にメイスを構えさせた。

姫路さんは気難しそうな表情を見せる。

「まあ、西村教諭の補習は嫌だしね。必死に足掻かせて貰うわ!」

「邪魔をするのなら退いてもらいます!」

メイスは棍棒から発達した武器。

重量のある柄頭と柄の二つの部位からなり、複数の部品を組み合わせて構成される合成棍棒の一種。

でも柄の先に重い頭部を有することにより単体棍棒なんかよりもずつと高い打撃力を生みだせるわ!

「ハイ・メガ・キャノ」させない!」「」

私は姫路さんの隙を、

ガキイイイツ

「!」

姫路さんの召喚獣がメイスの一撃に反応した!?



点数差が顕著なので、直ぐに弾き飛ばされた。

「優等生の癖に、味のある真似を…ね。」

熱線を撃つ素振りをし、迂闊に突っ込んだ私を迎撃したんだ。

「行きますっ！」

スタタタタッ！

は、はや！

まるで弾丸じゃないの！

「タアッ！」

激しい剣撃が私の召喚獣を襲う。

「貰います！！！！」

「格下だって、殺る時は殺るんだ！」

剣とメイスがぶつかり、激しい火花が飛び散る！

「う、受け止めたんですか！」

「この距離で、ハイ・メガ・キャノンを撃てば、姫路さんも巻き込まれるわ！」

「でも、近接格闘の間合いに入りましたね…！」

罅迫り合いの中、姫路さんの召喚獣の拳が飛んできた。

「……ッ」

点数が徐々に減らされていく。

私の召喚獣の装甲が破壊された。

「終わりです！」

「ま、まだぁー！ー！」

メイスを放棄し、格闘戦に移行する。

姫路さんはメイスを遠くへ放り投げた。

姫路さんの点数は319点…私は109点か。点数差は戦闘前よりは縮まったけど、三倍か…詰んだかな？

もう、ダメか。

シンクロが無いと……ん？

辺りを見回すと、律子の召喚獣が持っていたウォーハンマーが落ちていた。

ガチャッ！

傷だらけのハンマー…不思議と手触りが良い。

「私にもっ！意地を張るくらいならーっ！ーっ！ーっ！」

槍のように突っ込む！

ガキイツ！

「はあ、はあ、はあ……………」

私の召喚獣は姫路さんの召喚獣の装甲を破壊しただけだった。

無慈悲に振り降ろされる武器に反応すら出来な……………！

……………

視点：啓吾

「姫路、見事な腕前だ。」

「あ、有難うございます。」

俺と姫路は古典のフィールドまで撤退していた。

さて、どうしたもんかな。

「松下！明久と水瀬さんの試合が始まる」

「そうか…見に行きたいが、教室に戻って回復試験を受けないとな」

「吉井の事が心配じゃないのか？」

「アイツは必ず乗り越える。そういう奴だから、お前も心配するな」

「ツチ…どうなっても知らないぞ。」

須川は窓から運動場へ跳躍した。

「姫路…教室に戻るぞ。」

「はい。」

俺はFクラスの教室へ入っていった。

第11話 シンクロを捉えろ！最強ペア発進（後書き）

次回は明久と水瀬さんのタイムマンを書きます

## 登場人物紹介5（前書き）

ついに五回目の紹介です。

今回はBクラスの『同調』ペアの二人を紹介します。

## 登場人物紹介5

岩下 律子（変更点のみ）

・数学のみAクラス並。

・真由美とは『一心同体』と言える程の深い関係を持つ。

・『同調』シンクロは真由美とだけでなく、波長と振幅さえ噛み合えば、誰とでも出来る。

・中学時代の恭二を知る、数少ない人物。

菊人 きくいり 真由美 まゆみ

・数学のみAクラス並。

・律子とは『唯一無二』と言える程の親密な関係を持つ。

・『同調』シンクロは律子とだけではなく、波長と振幅さえ噛み合えば、誰とでも出来る。

・中学時代、水瀬の傘下にいたらしく、彼女を慕っている。

## 登場人物紹介5（後書き）

PV12000、ユニーク2000を突破しました！

今回は、明久VS水瀬さん！

長くなるので更新は遅くなりますが、待っててください。



第12話 雨の中の決闘！明久VS水瀬（前書き）

バカテストは今回もお休みです、ごめん！

## 第12話 雨の中の決闘！明久VS水瀬

視点：明久

僕も水瀬さんも、びしょびしょに濡れていた。

雷は激しく鳴り響き、雨は一層強くなっていく。

「何を今更、召喚獣に頼るものかつ！」

15時過ぎの運動場で、ただ一人の女性を見つめ続ける。

「あああああ！！！」

僕は全速力で、水瀬さんへ突っ込む。

シユバババババツ！

右に左にフットワークを繰り返す！

障害物の無いフィールドの戦い方を思い出すんだ！

前へ 前へ 前へ 前へ 前へ 前へ 前へ 前へ ！

腰の木刀を抜き、

「デヤアアアツ！！！」

水瀬さんの眼前で、運動場を叩く！

ブオオツ！

砂煙の向こうの人影へ、

「判子を押しす！」

水瀬さんの掌へ、

ドオ！

「大した威力だっ！」

ズササササア！

「しかし！」

聞こえる。

「『蒼天拳舞』！！！」

僕は木刀で受け止める。

刀がギシギシと音を鳴らす…！

ダツ！タンツ！

あの人の間合いから出る！

「やる。三年前の迂闊な振る舞いに謝罪しなきゃね。」

……。

「決めたわ。ちょっと、本気出す。」

ゾクッ！

走る悪寒。

「後で西鉄の野郎に反省文書いてやるから……不登校になるんじゃないかね、よお！」

「ちいいい」

僕は野球用のバックネットの上へ飛び上がる。

水瀬さんの脚が……運動場を踏みつける。

ビキキキッ！

足を中心に地面がひび割れた。

恐れるな……。

『竜光』に手をかける。

「『一の剣：竜爪』オオオ！！！！」

重力、全体重を乗せた一撃。

相手の頭上から突く！

「迎え撃つてやるよ。」

渾身の一撃に、水瀬さんが片手で倒立し、脚を振り上げる！

クルッ

「！」

僕は水瀬さんの脚の上に木刀を軽く突き立てた。

「勢いを相殺し、私の上に立つか。」

振り上げた足の慣性で、水瀬さんが直立する。

「もう一撃！」

木刀を肩に叩き込む。

バシィッ！

「機敏さだけは二流…素晴らしいな。」

水瀬さんが僕を見逃さず訳はない。

「『銀狼乱舞』ッ！」

「そう来ると思った！『九頭龍閃』！」

剣術の基本である9つの斬撃、

「壹：唐竹」

「貳：袈裟斬り」

「参：右薙」

「肆：右斬上」

「伍：逆風」

「陸：左斬上」

「漆：左薙」

「捌：逆袈裟」

「玖：刺突」

を同時に繰り出す乱撃術。

一度入れば、相手に抜け出す術は無い。

初めて水瀬さんの表情が歪んだ。

サツ、ササツ、パシィツ、ガツ、ガツ、ググツ、サツ、パシツ、ダ  
ンツ……！！

この連撃を抜け出した！

「だが、交わした場所には僕が居る！」

防御を捨て、鳩尾へ木刀を突く！

キ…キキキ…ギイツ！

なんて反応の早い！右腕で受けられた；

「か、勘弁して下さいよ！」

水瀬さんはニツとする。

「まだいるじゃないか。私に迫り来る《強者》がさ。」  
張り詰めた空気。

「降伏するかい？あんたの体力は一時間くらいで尽き果てるよ。」

「残念だけど、お断りするよ。貴女に負けるつもりはない。」

「私に挑んだだけはある。………来な！」

ヒュバツ。

「ほお。」

「まだ闘いを楽しむその余裕…消し去ってやる！」

「諦めの悪い奴だ…ね！」

ゴツ！

僕は撥ね飛ばされた。

水瀬さんは上着を脱ぎ去る。

「大したもんだけど…鈍り鈍ったその鈍刀じゃあ、やれてその程度だね。」

「そ、そうだから…諦めない！」

「だよ。こんな所まで自分を追いかけてきたアンタが、諦める筈がない。」

パンツ！！！！

僕は頬を叩く。

水瀬さんがどんなに強くとも、無茶でも何でもあろうと、僕は足掻く！！！！」

木刀を握り、走る走る！

狙うは、顔面。

真っ直ぐに木刀を！



- - - - -

視点：水瀬

「バカが！同じ手が通用する……か!？」

私の足が…運動場の砂…水を含んで泥となっていたのか！

泥濘に足が深く入り…抜けない！

こいつ…最初からこれを！

動きが止まる。

足が使えないなら、拳を振って牽制するしかない。

ニヤリと笑う吉井。

そして……

「牙突一式い！」

助走がつけられない…打ち負ける！

パァーーン!!!

威力負けした衝撃に突き刺さっていた身体が吹き飛ばす！

ダン！と重々しく着地して、吉井の剣撃を着地の衝撃を利用し、流すように投げ飛ばす！

「く、くそ！何でも出来るのかよっ！」

「潜った修羅場の数が多いからね。」

「なら、力づくで、圧倒的な力で、押し伏せる！」

「アンタが言える立場かい！？」

私は全速力で、奴に狙いを定める。

打て、撃て、射て、討て！！！！

放て、拳撃、脚撃、肩撃、肘撃を！

接近して、接近して、接近しろ！

「あああああ！！！！！」

ズガアアアアアア！！！！！！

吉井の顎に、拳を打ち抜いた！

ズサアアアアア……………。

高く、彼方へ吹き飛ばす！

「ふう…やっと殴れたわ。」

溜息をつき、吉井の側によるが、

「おかしい。確かに殴った感覚はあったんだけど…。」

完全に入った攻撃。

しかし…吉井は再度立ち上がったのだ。

「……………」

雨と雷が止み、日光が遮った。

閑散としている……二人以外に誰もいない世界が広がる。

「夜中の満月の日に闘えたら良かった…吉井…ムカつき以上に嬉しいよ。さあ、やってみな！」

腕を振り下ろす。

吉井を捉えた一撃。

しかし、

「おおおっ！！！！」

吉井は雄叫びを上げ、私の一撃を素手で正面で受け止めた！

こいつ…痛覚を感知していない！？

啞然とする。

一瞬の間、されど隙…。

ゴオオツ！！！！

「！！」

眼下から木刀の一撃が頬を撃つ！

ダアア！

右足で奴を踏み潰すべく、勢いをつけ…下の地面を砕く！

だが吉井は寸でのところかわし、再度突撃する！

「上等ッ！」

笑う吉井。

来る！

最早、一切の常識が通用しない。

ダン！！

地面を蹴り、私目掛けて、跳ぶ吉井。

「『百烈剣』！！！！」

「『蒼天百掌』！！！」

子供でも解る理屈：武器に素手は、不利！

タンツ！

長い長い撃ち合いに終止符が打たれた。

- - - - -

視点：明久

「カ…カハツ」

体操服は泥にまみれていた。

準備運動は入念にしたのに：身体中が痛い。

倒れ込む僕に、水瀬さんが歩む。

「バカが、無理しすぎなんだよ。」

「し、勝負はまだ、つ、続いています。」

「無茶するんじゃない。」

水瀬さんが僕の腰を軽く叩いた。

「い、だあ……………」

筋肉痛に陥っていた。

「保健室に行くよ。」

水瀬さんに担がれながら僕は気を失った。

……………

目を覚ますと、保健室にいた。

「起きたか。」

「……………水瀬さん。」

ブラしかつていない水瀬さんが、僕の頬つぺたを触っていた。

「あんな事に付き合わせてしまった。済まなかった。」

「大丈夫です。僕から頼んだようなもんですから。」

「強がりな止しな。」

ガラッ

「終わったらしいな…ほらよ。」

啓ちゃんが水瀬さんにバスタオルを投げた。

「シャワールーム、空いています。職員室に來いとこの事です。」

「西鉄は何て？」

「『校内暴力』は校則違反…ペナルティとして、『戦死』扱い、後に『処罰』も与えられるでしょうね。」

「そっか…根本には？」

「伝えました。」

「よし…行くわ。」

下着姿で、水瀬さんは出ていった。

「無様に負けたか。」

「？」

「悔しいだろ。」

！

「……まるで齒が立たなかったよ。」

「加えて彼女は『病み上がり』だったしな。窓の外から見ていたが……あいつ、一度も左脚を使わなかった。」

「……………」

啓ちゃんは溜め息をついた。

「は、はは……。今何時？」

「16:18」

「状況は？」

「お前が水瀬さんを退けたことで、Bクラスは守りに入った。」

「さ、最悪な形でだけどね……」

「過程はどうあれ、これは戦争だ。カードを生かすも殺すも、クラス代表次第だ。それに、水瀬さんは停学を覚悟でお前に挑み、真剣勝負をした。」

「それでいいのかな？」

「それでいい。でなければ、彼女に失礼だ。」

啓ちゃんは、



「あの《銀狼》を相手によくここまで持ちこたえた。坂本は大喜びだ…立てるか？」

「うん。水瀬さんが包帯巻いたり消毒してくれたから。」

僕は保健室のベッドから飛び降りる。

啓ちゃんは僕を支えるように教室まで介抱してくれた。

**第12話 雨の中の決闘！明久VS水瀬（後書き）**

思うように状況を説明できません；

今回は屈指のggdggdさ…まだBクラス戦は続くのに…焦りを隠せません。

しかし！

今回の内容はまだ、編集しやすい場面ですので…イケると思います！

次回もお楽しみにっ

### 第13話 沈静を破れ！人質作戦を打破せよ

視点：啓吾

これは酷いな…。

「まさかこうくるとはのう」

「卑怯だね」

教室に引き返した俺と明久を迎えたのは、  
辺りに散乱する卓袱台と、引き裂かれたブルーシートだった。

「うむ。地味じゃが点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

秀吉と明久は教室を見渡していた。

姫路が暗い表情で、しかし、唇を噛み締めるのがみえる。

「姫路よ。どうしたのじゃ？」

秀吉は心配そうに声をかける。

「わ、私が居ながら…」

「姫路よ。警戒を怠ったワシにも責任はある…済まぬ。」

俺は畳に座り、

「しかし…徹底した手際だな。」

「バリを全てぶっ壊されてしまった。」

俺は坂本と面面向かう。

「幸い個人の貴重品や所有物に手は出されていないな。」

「だが…こちらが判断を誤った…事を、皮肉にも明瞭にされた。」

「坂本。何故気づかなかった？」

坂本は答える。

「根本へ確認に行っていたのさ。念のために『5時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日の午前9時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する』協定の確認をしていた。故に教室は空になってしまった。」

「出来れば5時までにはケリ…着けておきたかったな。」

「だがそうはいかなかった。それに、俺達は神経を使い、疲弊している。根本と芳野に有利に働いたって訳だ。」

時計は16:42を差している。

「残り18分。前線にいる島田と須川が気になる…坂本、どうすればいい。」

「明久を休ませたい…頼む。」

俺は廊下を走り抜け、一階の大広場へ駆け降りた。

.....

二階で須川と合流した。

「須川……。」

「根本はこの程度で終わらせる男ではない。気を引き締めよう。」

一階に下り立つと、大変なことになっていた；

「待たせた。戦況は！？」

「団長、職人！」

横溝に現状を聞いてみると、島田が人質になったのを聞いた。

人質か……！

俺は須川と横溝と共に、現場に到着した。

「島田！」

「ま……つし、た……。」

ガチャッ!!!

「止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

島田を捕らえている敵の1人が声を張り上げた。

「止めを刺せ。俺に脅しはきかん。」

「待て。島田がやられたら、後ろから残党が押し寄せる。」

須川の忠告は耳に入らなかった。

「総員突撃用意。」

俺は部隊に指示する。

「ま、待て、松下！コイツがなんで捕まったと思っている？」

「捕まるようなクズに、理由を聞いてもつまらんだだけだ。」

「ま、松下！戦死は嫌よ！」

俺は冷淡に続ける。

「こちらの教室を破壊し、人質をとる。根本の指示とはいえ、非人道的な行為に走ったその報いに：覚悟はあるのか？」

「言っまでもないんとちゃうかあ？」

玄関の掃除用具入れの中から、一人の男が出てきた。

ゴツゴツとした顔付き…髭を濃く生やした大柄の大男であった。

「笹倉。」

須川が笹倉の眼前に飛び上がる。

「変わらず面白いやつちゃ。須川あ。」

「久しいな。」

「勝負するとすつかねえ。西さん、笹倉俊二郎、須川亮に総合科目で挑みますわ…試獣召喚!!!」

「応じる。試験召喚!」

召喚獣が出現する。

「オオオオオツ!!!」。

すれ違う二人の召喚獣。

須川の召喚獣は大鎌で人質をとっていたBクラスの生徒を皆殺しにし、

笹倉の召喚獣は島田と他に人質になっていたFクラスの生徒を捻り潰した。

「な、何!?」

「俺たちまで巻き込むなよ!」

「ウ、ウチ…補習は嫌!」

「恨むぞ!須川あ!」

何処からか、

「戦死者は補習!!!」

「……て、てつ、じん;」「」「」

「この戦争が終わるまで特別に講義してやろう!何時間かかるかわからんがたっぷりと指導してやる。」

「たッ頼む!見逃してくれ!あんな拷問は耐えられない!」

「ウチも嫌よ!あれは国際法に違反する…拷問よ!」

「あれは立派な教育だ。終わる頃には趣味が勉強で尊敬する人が二宮金次郎といった理想的な生徒に仕上げてやるっ」

「鬼だ!誰か助けッ、イヤアアア!」

「あ、あ、アッー!!!」

4人は叫び声を残し、鉄人に連れて行かれた。



「笹倉。勝負と行くつぜ。」

《総合科目》

2 - F 須川亮 1074点

VS

2 - B 笹倉俊二郎 2371点

「須川…得意教科は何や？」

「数学には自信がある。」

「そうか。西さん、数学に変えてくれへんか？」

鉄人は4人抱えたまま、フィールドを変更した。

「これで対等や。戦争よりも一騎討ちの方がおもしろいわ…!…」

「後悔するんじゃないぞ。」

《数学》

2 - F 須川亮 228点

V S

2 - B 笹倉俊二郎 197点

「松下。明久と残存戦力を連れて逃げろ」

「わかった。任せる。」

俺は須川とハイタッチし、撤退した。

- - - - -

視点：亮

俺の召喚獣はFFF団長に相応しい装束と、巨大な大鎌を、そして  
カッターを有している。

対する笹倉の召喚獣：でさえ。

召喚獣の身長は本人の身長のおよそ1/3になると言われているが…70  
cmくらいある。

俺の身長は177cm…換算すれば約59cm。

大きさの違いは一目瞭然だ。

「中々の点数や。根本に僅かに届かんのが惜しいわ。」

「根本はBクラス代表。一番Aクラスに近い男だからな…卑怯だが。」

「あいつにはBクラスがお似合いや。Aクラスに入ってもたら、つまらんわ。」

「さて、やりますか。」

「さ、来いや。」

笹倉の召喚獣の装備は、刺付棍棒か。

俺は召喚獣に鎌を持たせ、相手に向かって突っ込ませた。

ぶつかり合う武器。

「点数差はパワーでカバーや！」

お、重い！

「機動性は下がるが、速いだけの半端な攻撃は、分厚い装甲には通じまい！」

間合いを取る。

「死神：お前の渾名やったな。」

互いに点数が減る。

「なに、まだまだ、これからだろ？」

笹倉の召喚獣の突進を、紙一重で避ける。

「厄介な素早さや！せやけどなあ！！！」

笹倉の召喚獣がカウンターの体勢になる。

「「恨みっこ無しの、死合だ（や）！」」

召喚獣の左腕を吹き飛ばされるが、片手で……奴の右腕を切りとばす！

その時だった。

チャイムが鳴り響いた。

……。

「次の攻撃で、相討ちになったみたいや」

「笹倉。今度は素手でやろうぜ。」

「何時でも構わん。」

「呼吸つく。」

「また近い日にな。清涼祭が楽しみや！」

「今日は引き下がる…しかし、やることが一つ残ってるんだよな。」

「奇遇や。儂もやること思い出したわ。」

俺と笹倉は、自分で自分の召喚獣の首をぶっ潰した。

「西さん、今日は遅くまで補習してください。」

「待て笹倉、お前はBクラスなんだから、Fクラスの俺が優先だろ？」

鉄人が二人の肩を叩く。

「今日はもう遅い。俺は朝の5時から出勤している…補習なら何時でもしてやる。」

「朝5時やて!?!」「朝5時だと!?!」

俺と笹倉は苦笑いをしながらも、鉄人の後を追うのだった。

- - - - -

視点：啓吾

協定通り…17時に停戦し、戦況をそのままにして明日の午前9時に持ち越しとなった。

予定通りに新校舎に進撃できたので明日はそこからとなる。

今は明日の事で話し合っている所だ。

土屋がスタッと参上した。

今回の戦争も、土屋は戦線に出ず情報収集を任務としていた。

「……………Cクラスが試召戦争の用意を始めている。」

坂本は、

「相手はAクラスか…いや、それはないだろう。Bクラスの設備を横取り…漁夫の利を狙うのか…目障りな連中だ。」

「……………加えてCクラス代表の『小山 友香』は、『若女将』と呼ばれた実力者だ。」

「雄二…どうするの?」

「そうだな。CクラスにDクラスを攻め込ませ、疲弊させられれば、俺達に攻め込む気もなくなるだろ。」

「それに、僕らが勝つなんて思ってもいないだろうしね。」

「協定は早く済ませよう。姫路…今日は助かった。」

「有難うございます。」

「よし。松下、明久、亮、横溝。Cクラスに行くぞ。」

「別にいいけど。」

「分かったよ。」

「俺も行くか。」

「やろっ!」

秀吉が時計を見て、

「急がんとCクラス代表が帰ってしまうぞい。」

「うん、そうだね。急がないと。」

5人でCクラスに向かう事になった。

.....

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

Cクラスの教室には、二人しか居ない。

土屋の情報が正しければ…戦争の準備をしているらしいが…隠したみたいだな。

スタッ

紅茶を持ちながら、一人の生徒が御辞儀した。

「ごきげんよう。私がCクラスの代表の『小山 友香』です…よろしく。」

「悪いが単刀直入にいかせてもらおう。俺はFクラス代表の『坂本雄二』。クラス間交渉に来たんだが…時間はあるか？」

「ふう〜ん…見掛け通りの野性味溢れる良い男ね。気に入ったわ。」

小山は雄二の言葉を聞き、いやらしい目付きでこちらを見る。

「不可侵条約を結びたいんだが。」

「不可侵条約？どうしようかな…宮野くんはどう考える？」

「却下。FクラスはBクラスと試召戦争に関する行為は一切禁止する内容の協定を結んでいる。」

宮野と呼ばれた男が、こちらを見た。

「Cクラスは第三者。関係は無いだろ？」

宮野と坂本が対峙する。



「噂には聞いていたが、Fクラスは屑の集まりのようだな…心中を察する。」

困った事になったな…坂本と宮野が口論を始めやがった。

「御互い様だな。根本の尻に敷かれた割には、強がりか上手いに見える。」

「校則違反に暴力…身勝手な思想で、迷惑をかけるばかりの輩。まだペットの方がマシだ。」

「フン…。」

呆れる坂本を尻目に、明久が宮野の胸倉を掴む。

「沸点の低さには脱帽せざるを得ない。」

「明久。」

坂本は明久の襟首を掴まみ、後ろへ放り投げた。

「汚い手で触るな…気持ちが悪い。」

「俺は話し合いに来たんだ…侮蔑な発言は控えてもらっ。」

落ち着いた口調で坂本。

明久の行為に対して、謝る気はゼロ。

「遠回しな言い分は面倒だ。」

「従う義理は無い。」

「俺の発言に法的拘束力は無いが、まともに意志疎通すら出来ないゴミは、さっさと消えな。」

坂本は宮野の言葉を鼻で笑い、宮野は小バカにしているらしく、呆れる。

「俺は、真面目で明朗快活な人は信用するが、社会不適合者の連中を信じるつもりはない。」

「よく言う。身勝手な尺度に心酔しているのはてめえのようだぜ？」

「友人を売り飛ばしたり、日常的に暴力を奮う者に言われる筋合いはない。考えれば…真の卑怯者は、Fクラスだ。」

「……………」

「専ら、頭より身体が先に動く哀れな連中だ…反論は出来ない。」

「心配するな。自覚はある。」

「自覚があるなら、『Fクラス』など存在しない。少し、勘違いしているようだな」

宮野の発言に隙は無い。

「この学園には、普通に過ごしたい者も沢山いる。」

「派手に過ごしたい奴もいるぜ。」

「規則の遵守無くして、ほざくのか。」

「縛られるのは嫌いでね…楽しんで通る道など、こつちから願ひ下げだ。」

「だから犯罪紛いの行為が許される訳がない。盗聴、盗撮、器物損壊、名誉毀損…社会が容認するとはとても思えない。」

坂本は目を細めた。

「宮野…俺達が『学園や社会にとって+となる功績』を出せば、どうする?」

「信賞必罰。『過程』における『非人道的行為』は一切許さないが、良い『結果』が出た場合に限れば褒め称える所存だ。」

「そつか…なら同盟を結べ。」

須川、横溝、明久は完全に論破された様子で、ポカンとしていた。

宮野は頷いた。

「小山…どうする。」

「宮野…ちよつと言ひ過ぎよ。彼等はDクラスに勝利しているもの。既に『結果』は出しているのだから、少しは寛容になりなさいな。」

小山は坂本をじっと見つめた。

坂本は俺達に帰宅するよう命じ、

宮野を強くぶん殴ったっ!!!

ズササアーーーーッ!!!

「「「坂本!?!?!」」」

小山は呆然となりながらも、宮野に駆け寄る。

「小山: 宮野に伝えとけ: 明日になったら『ぶっ殺すっ!!!』」  
てなあ!」

怒りを露にする坂本を、俺達は追いかけて行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0891x/>

---

バカとテストと召喚獣 ~ 伝説と呼ばれたバカ ~

2011年10月25日03時04分発行